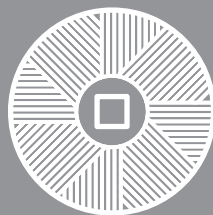
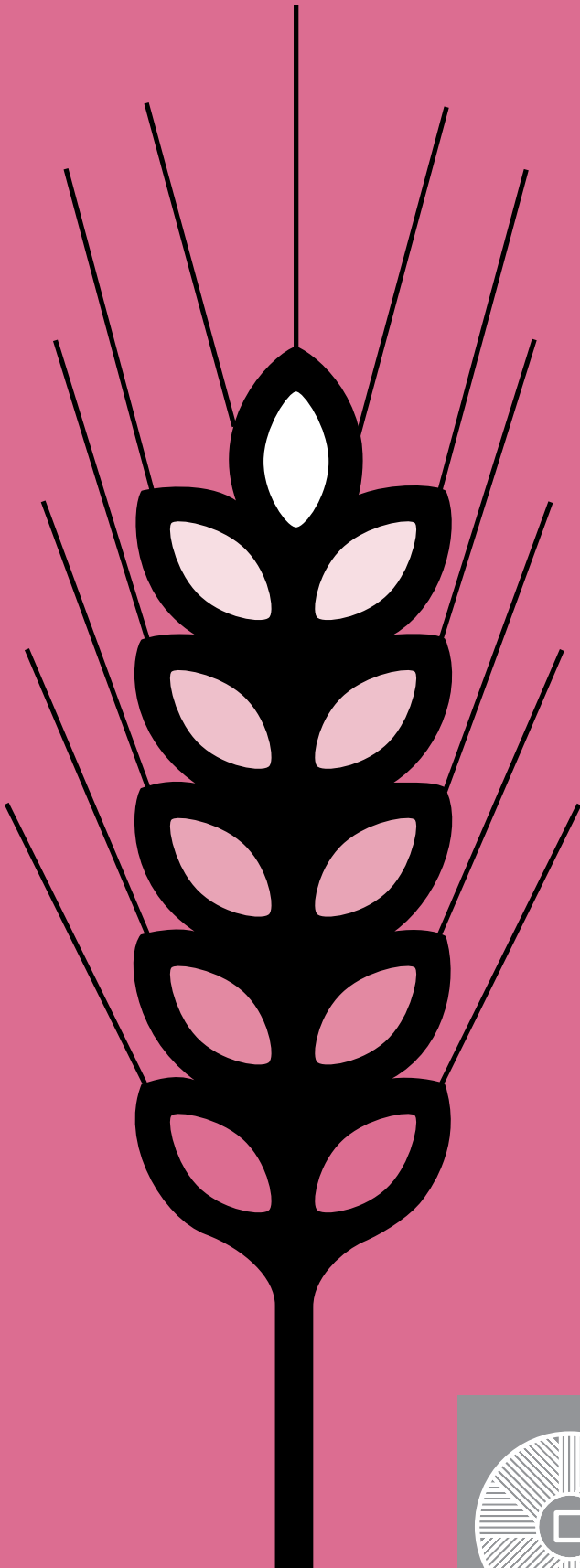


ISSN0913-8838

製粉 振興

2011
No.539
11



財団法人 製粉振興会

★目次

製粉産業の抱えている課題について…………… 3

24年産国内産小麦の入札取引について…………… 5

製粉協会 参与 満留幸男

麦制度の改正による港湾業務の現状と課題
(本船の大型船化による諸問題)…………… 13

千葉共同サイロ(株) 取締役 深尾祐一

フード・コミュニケーション・
プロジェクト(FCP)について…………… 19

農林水産省 食料産業局 企画課 食品企業行動室
フード・コミュニケーション・プロジェクト事務局

もっと泡とおいしさ…………… 28

和洋女子大学特任教授 お茶の水女子大学名誉教授 畑江敬子

小麦粉のある風景
フランスパンはおいしい…………… 30

食文家 ひらの あさか

世界の粉界展望…………… 34

業界ニュース…………… 32

国内資料…………… 48

編集後記…………… 57

製粉産業の抱えている課題について

今年もあと1ヶ月強を残すのみとなった。現時点でわれわれ製粉産業が抱えている課題について整理してみたいと思う。

まず第一点目は環太平洋パートナーシップ(TPP)協定を始めとする国際化の動きについてである。政府は11月11日に「TPP交渉参加に向けて関係国と協議に入る」ことを表明した。TPP交渉については昨年11月に閣議決定された「包括的経済連携に関する基本方針」において「環太平洋パートナーシップ(TPP)協定については、その情報収集を進めながら対応していく必要があり、国内の環境整備を早急に進めるとともに、関係国との協議を開始する」とされたが、3月11日に発生した東日本大震災の影響を受け、正式決定が延期されてきた経緯がある。今回の表明は昨年11月の閣議決定からTPP交渉参加を前提にさらに踏み込んだ内容になっている。TPPについては、そのメリットとして世界の成長センターとも言えるアジア太平洋地域の成長力を取り込むことが期待できる一方、10年以内の関税撤廃が原則とも言われており、その場合わが国農林水産業や関連産業が大きく影響を受けるとみられている。例えば昨年農林水産省が公表した資料の中で「全世界を対象に関税を撤廃し、何も対策を講じない場合」年間4.5兆円程度農林水産物の生産額が減少し、さらに関連産業も含めた国内総生産への影響は年間マイナス8.4兆円程度、350万人程度の就業機会が失われるとしている。

また、TPPと同時並行で日豪や日韓等の二国間EPA交渉を推進していくことも考えられるが、いずれにしても、TPP等の経済連携協定が様々な産業や業種内でメリット・デメリットを生じる可能性がある。まず政府においては国内各分野の状況を充分把握したうえで協議等進められるようお願いすると同時に、われわれとしても今後の交渉内容等を今まで以上に注視していく必要がある

第二点目は、小麦及び小麦粉も含めた安定供給の確保についてである。3月11日に発生した東日本大震災において、当初は被災した東北地方だけでなく首都圏においても小麦粉二次加工製品を含めた食料品が一時的に店頭から消えるほどの状況であった。その後被災しなかった各地の努力もあり供給が予想外の早さで回復した。東日本では道路網が寸断され、小麦を輸入する一部の港も被災し、さらに福島原子力発電所が被災した影響等を受け計画停電が実施される厳しい状況下にあったが、製粉各社は小麦粉安定供給を第一の使命と考え供給を続けた。当然のことであるが小麦粉を安定的に供給するためにはまず、海外から確実に小麦が輸入される必要がある。この一年の状況を振り返ってみると、昨年秋以降北米の春小麦地帯及び豪州において生育期の天候不順等に見舞われたことや北米からの配

船の遅れ等により一時的に日本向け高品質小麦の供給がタイトな状況になった。また、世界の穀物需給を見ても昨年8月から今年6月までロシアが小麦等穀物の輸出を禁止するなど決して安定しているとは言えない。さらに今後人口の増加、新興国における所得向上に伴う穀物需要の拡大や世界的な異常気象など小麦の需給はさらに不安定さを増すのではと懸念される。まず国においては、従来以上に産地の情報収集を行うとともに中長期スパンで安定供給が確保できるように輸出国との関係強化を望みたい。

また、輸入港である日本の港別需給という面でみると、昨年10月から導入された「即時販売方式」では政府が商社から買い付ける際の入札において、原則として原料銘柄別に名古屋以西と東に二分割され、かつ、需要月の4ヶ月前に製粉企業が港別・銘柄別に申し込むことになっている。震災以降夏場にかけて東日本を中心に電力供給が制限され、ユーザーがどのような対応を取るか不透明な中でも製粉各社は需要月の4ヶ月前に原料の申し込みを行ったわけである。冬場に向けても幾つかの地域では既に節電目標を示しての要請が来ている。不測の事態への対応も含め、小麦及び小麦関連製品のサプライチェーンを確実に確保するために柔軟に港への配船を変更できる仕組みの検討が必要だと考える。また、世界的な傾向として穀物の需給面で不安定感が増すなか、小麦の9割を輸入に頼るわが国において、国、商社、サイロ、製粉企業等が従来以上に一体となって対応していくことの重要性がさらに高まっていくことになろう。

第三点目は「麦産業のあり方」の検討についてである。今年10月に「食と農林漁業の再生推進本部」は「我が国の食と農林漁業の再生のための基本計画・行動計画」を取り纏めたが、その中で「農林漁業の成長産業化や輸出戦略の立て直し等の課題に対応しつつ、食品産業のあり方や展開方向を示した「食品産業の将来ビジョン(仮称)」を平成23年度中に策定し、これに基づき進めていく」とされた。今後「麦産業のあり方」の検討についても「食品産業の将来ビジョン(仮称)」を踏まえて、国内産小麦、SBS方式等々様々な課題が取り上げられると思うが、原料である外国産小麦及び国内産小麦が製粉企業に安定的に供給され、かつ、小麦粉、小麦関連製品が確実に消費者に届けられるようにしっかりしたサプライチェーンが確保されること、それを第一義に検討を進めてもらいたいと思う。

上記以外にも25年産に向けた民間流通麦の仕組みの検討、外国産小麦の政府売渡価格における内外格差縮小(マークアップ引下げ)等課題は多い。生産者、商社、サイロ、製粉企業等が自らの立場を踏まえつつこのような課題に対応していくことが必要である。

24年産国内産小麦の入札取引について

満 留 幸 男

1 はじめに

24年産国内産小麦の入札は、去る9月15日に第1回目が、27日に第2回目が実施された。

最近、国内産小麦の取引の仕組みの決定が遅れ、入札の実施も遅れ気味であったが、特に23年産は、取引の仕組みの決定が10月末となったことから、入札も12月実施と大幅に遅れ、国内産小麦の取引の基本である「播種前に価格決定・契約」とはとても言えない結果となった。

これらの反省を踏まえ、24年産は、播種前ぎりぎりではあるが3年ぶりに9月中に入札が終了し、現在、残りの数量について相対取引が取り進められている。

以下、本稿では、24年産の入札取引結果等を振り返ってみたい。

2 24年産の取引の仕組み

24年産の取引の仕組みについては、製粉振興6月号(2011年NO.534)において詳細に記述したので、本稿では簡単に記述する。

(1) 検討の経過

23年産の仕組みの決定が遅れたことから、23年産の仕組みの整理に当たって、「24年産の仕組みについては早急に検討を開始する。」とされた。これを踏まえ24年産の仕組みの検討に当たっては、「24年産の仕組みに関する作業チーム事務局打ち合わせ」を23年1月18日に開催し、「通常年ベースの8月に入札が行えるように、5月下旬までに取引の仕組みを決定することが必要」であることが確認された。

このため、2月中に検討項目とこれに対する生産者・実需者双方の意見がとりまとめられ、第1回作業チームが3月14日に開催されることになっていたが、東日本大震災が3月11日に発生したことによって、3月30日に延期・実施された。

しかし、生産者・実需者双方にとっては、特に生産者サイドにおいては、東日本大震災、これに伴う東京電力福島原子力発電所の事故による被害は甚大で、その迅速な対応が大きな課題となった。

このような状況を踏まえ、4月27日に開催された第2回目の作業チームにおいて、「24年産の取引の仕組みについては、合意できている項目のみを決定し、その他の課題は、25年産に持ち越すこととし25年産の仕組みの協議を早急に立ち上げる。」ことが合意された。

(2) 決定内容

24年産の取引の仕組みは、以上のような経過を経て5月31日に開催された第3回作業チーム、に引き続き開催された民間流通連絡協議会において、次のように決定した。

ア 入札取引における値幅制限は、元に戻すこととし $\pm 10\%$ とする(23年産は、特例的に $\pm 30\%$)。

イ 24年産の入札取引における基準価格は、23年産入札取引価格(または当初相対価格)に24年産第1回入札取引時点での変動率を乗じた価格とする。

(23年産の基準価格は、22年産指標価格(入

札取引価格)であったが、23年産から実際の取引価格は、落札価格を取引時点の政府売渡価格の変動率によって事後調整することになったことから、23年産の入札取引価格についても調整が必要となったことによるものである)。

ウ それ以外の事項については、23年産の取引の仕組みと同様とされた。

3 地方協議会の開催

取引の仕組みの決定後、生産者サイドから実需者サイドに対し24年産の販売予定数量が提出され、一方実需者サイドから購入希望数量が提出された。

これを受け、7月中旬から8月中旬にかけて各産地において、産地の生産者・実需者間で情報・意見交換を行うために「地方協議会」が開催された。地方協議会では、産地側から23年産の作柄・品質状況、産地における品質向上・物流改善の取組、24年産の販売予定数量等について報告・説明が行われ、実需者側から品質評価、品質・物流改善要望、購入希望を反映した24年産の作付け計画・販売予定数量の見直要望等がなされ、意見・情報交換を行うとともに、24年産の契約数量に対する許容値について協議・決定された。契約数量の許容値は主要な生産県では、例年どおり±15%と決定された。

4 全国協議会

地方協議会における各産地とその実需者との意見・情報交換を経て、8月17日に全国レベルの「民間流通連絡協議会(全国協議会)」が開催された。全国協議会では、生産者サイドから地方協議会での意見交換を踏まえて検討・修正された24年産の販売予定数量が、実需者サイドから購入希望数量が、入札実施機関である全国米麦改良協会から入札関係スケジュール、義務上場・

希望上場名柄及び上場数量、上場銘柄の入札基準価格等が提示され、これらについて次のように決定された。

(1) 販売予定数量

生産者サイドから提出された販売予定数量は、948千トンで24年産の販売予定数量として了承された。民間流通始まって以来最大であった23年産の951千トンを3千トンに下回ったが、ほぼ同規模の数量であった(表-1)。

これにより、生産者サイドは948千トンの供給義務を負う一方、実需者サイドは引き取り義務を負うことになるとともに、この数量をもとに24年産の入札義務上場銘柄及び上場数量が決定されることになった。

販売予定数量を北海道・府県産別に見ると、北海道産は、633千トンで前年産を2千トン上回り民間流通始まって以来最大の数量の更新が今年もなされた。「ホクシン」より反収の高い「きたほなみ」への転換、集中が行われてきたことによるものである。

一方、府県産は、年々減少傾向が続いており24年産も前年産を5千トン下回る315千トンとなっている。作付面積の減少によるものである。

(2) 購入希望数量

一方、実需者サイドから提出された購入希望数量(表-1)は、前年産を45千トン上回る904千トンで、これも民間流通始まって以来最大の購入希望数量であった21年産の880千トンを24千トン上回る数量となった。

府県産についても、前年産より12千トン増加し345千トンとなり、年々販売予定数量が減少するなかで、2年連続前年産を上回る購入希望数量となった。

(3) 需給ギャップ

全国の販売予定数量と購入希望数量の差は、販売予定数量が購入希望数量を44千トン上回っ

表一 販売予定数量と購入希望数量

(単位 トン)

	20年産	21年産	22年産	23年産	24年産
販売予定数量	886,569	905,675	908,662	950,650	948,359
北海道産	574,940	574,719	586,155	631,105	633,220
都府県産	311,629	330,956	322,507	319,545	315,139
購入希望数量	832,841	880,344	817,572	859,311	903,923
北海道産	496,230	512,354	487,734	526,658	558,714
都府県産	336,611	367,990	329,838	332,653	345,209
差	53,728	25,331	91,090	91,339	44,436
北海道産	78,710	62,365	98,421	104,447	74,506
都府県産	-24,982	-37,034	-7331	-13,108	-30,070
ミスマッチ超過	103,268	84,699	127,995	172,173	108,808
北海道産	79,515	65,366	101,433	144,395	94,094
都府県産	23,753	19,333	26,562	27,778	14,714
不足	-49,540	-59,368	-36,905	-80,834	-64,371
北海道産	-805	-3,001	-3,012	-39,948	-19,588
都府県産	-48,735	-56,367	-33,893	-40,886	-44,784

たが、その差は前年産に比べ47千トン縮小した。これを産地銘柄別にみると、購入希望を上回る産地銘柄のいわゆる超過(過剰)数量総数は109千トンで、一方、下回る銘柄のいわゆる不足数量は64千トンで、前年産より過剰が63千トン、不足が17千トン減少し、ミスマッチ数量の差が縮小した。

供給過剰となった産地銘柄は、北海道産「きたほなみ」で94千トン、佐賀県産「シロガネコムギ」6千トン、茨城県産「さとのそら」5千トン、福岡県産「シロガネコムギ」4千トンで、この4産地銘柄でそのほとんどを占めた。

一方、不足銘柄は、パン用小麦の北海道産「ゆめちから」8千トン、同「春よ恋」5千トン、日本麺用小麦では、岐阜、愛知、三重、滋賀等の県産「農林61号」で10千トン、福岡、佐賀県産「チクゴイヅミ」で6千トン、等が主なものであった。

(4) 入札上場銘柄

入札上場銘柄は、販売予定数量が3千トン以上で県内流通の割合が80%以下の産地銘柄は

「義務上場」とされている。なお、それ以外の銘柄は「希望上場」できていることになっている。

24年産の上場銘柄は、26銘柄(義務上場22銘柄、希望上場4銘柄)で、23年産と同数(義務上場23銘柄、希望上場3銘柄)であった。

義務上場要件の販売予定数量3千トンを満たし「新規上場」することになった銘柄は、北海道産「ゆきちから」、茨城県産「さとのそら」の2銘柄で、販売予定数量が3千トンを満たさなくなり義務上場から外れることになった銘柄は、「さとのそら」へ全面的な作付転換が図られた群馬県産「農林61号」、作付面積の減少した滋賀県産「ふくさやか」、兵庫県産「シロガネコムギ」の3銘柄であった。

希望上場銘柄は、義務上を外れることになった兵庫県産「シロガネコムギ」と、23年産も希望上場した宮城県産「シラネコムギ」、栃木県産「農林61号」、群馬県産「きぬの波」の3銘柄、合わせて4銘柄が希望上場することになった。

表-2 国内産小麦の食料用供給量

単位 千トン

	19年産	20年産	21年産	22年産	23年産
供給数量	871	841	649	532	690見込み

(5) 上場銘柄の基準価格

入札基準価格は、23年産の入札までは「前年産の指標価格」となっていたが、24年産については「基準価格は、前年産の指標価格に当該年産の第1回入札実施時点の政府売渡価格(5銘柄平均)の変動率(1.185)を乗じた算出」された価格とされた。

23年産の取引の仕組みの見直しにおいて、「実際の取引価格は、指標価格を実際の取引時点の政府売渡価格(5銘柄平均)の変動率で事後調整した価格とする。」となったことを踏まえ、入札基準価格についても24年産の取引の仕組みの見直しにおいて、「事後調整」を行うこととされたことによるものである。

これにより、24年産は、23年産より18.5%価格を引き上げた上で入札に付されることになった。

(6) 入札日

入札は、例年どおり2回行うこととし、第1回目は9月15日、第2回目は9月27日に決定した。昨年の12月実施からすれば3ヶ月早められたが、例年の8月実施からすれば1ヶ月遅い、播種前ぎりぎりの実施となった。

5 入札結果

(1) 入札環境

ア 国内産小麦の集荷・販売数量

国内産小麦は、21年産以降不作が続いていたが、23年産についても不作が見込まれ、3年連続販売予定数量を30万トン前後下回る大幅減産によって国内産小麦の需給はタイトな状況にあった(表-2)。また、日本麵用小麦の主産地であ

る西豪州においても2年連続の不作で需給は逼迫しており、今年産の作柄についても未だ見通せる段階にはなかった。

このような日本麵用小麦の需給状況も映し、前述のとおり実需者の購入希望数量は史上最高の数量に達していた。

イ 政府売渡価格との価格関係

輸入麦の政府売渡価格(5銘柄平均、消費税込み)は、22年10月の価格改定においては47,860円/トンで、国際相場連動制が導入(平成19年4月)される前の落ち着いた水準にあったが、昨今の新興国の小麦の需要の増加や異常気象に加え金融緩和下の投機マネーの流入等によって小麦の国際価格が高騰し、これらの影響を受けた国の買入価格の上昇を反映して23年4月期の価格改定時には56,710円/トン(+18%)に引き上げられた。

一方、国内産小麦の価格は、22年12月に実施された23年産小麦の入札結果、48,732円/トン(22年産比-12.1%)で、ASWの公表価格がないため正確な比較ができないが、政府売渡価格の5銘柄平均価格(47,860円/トン)と比較しても高い水準となり、価格逆転現象は改善されずなお引続くことになった。

23年4月期の政府売渡価格の改定(56,710円/トン)を受け、24年産の入札基準価格は、57,966円/トンに引き上げられ、この基準価格、値幅制限±10%のもとで国内産小麦の居所が探られることになった。

(2) 落札結果

落札結果は、売手別、産地銘柄別に、申込数量、申込倍率、落札数量、落札残数量、落札加

表－3 平成24年産小麦の入札上場数量と落札状況

	産地	銘柄	第1回入札	第2回入札	全体
入札上場数量	15道県	26産地銘柄	125,610トン	125,370トン	250,980トン
申込数量			181,580	167,250	348,830
申込倍率			1.45	1.33	1.39
落札数量			123,790	121,530	245,320
落札残数量	6県	7			5,660
1回目	4県	5	1,820		
2回目	6県	7		3,840	
落札率			98.6	96.9	97.7
落札価格(税込)			59,736	56,919	58,340
基準価格(%)			57,987	57,946	57,966
価格変動(%)			+3.0	▼1.8	+0.6

表－4 年産別入札結果

	20年産	21年産	22年産	23年産	24年産
申込倍率	1.43	1.45	1.0	1.45	1.39
落札率	96.4	98.1	97.6	98.6	97.7
落札残数量	8,580	4,610	52,960	3,600	5,660
基準価格	40,545	56,024	59,739	55,465	57,966
落札加重平均価格(税込)	43,228	59,885	55,241	48,732	58,340
価格変動率	+6.6	+6.9	▼7.5	▼12.1	+0.6

表－5 落札価格と基準価格の関係(産地銘柄数)

	20年産	21年産	22年産	23年産	24年産
上限価格	8	27			9
基準価格を上回る	23	1		3	9
基準価格		1			
基準価格を下回る	2	1	29	23	8
下限価格					
計	33	30	29	26	26

重平均価格が、第1回目、第2回目ともに入札日に公表(表－3. 4. 5. 6)された。

ア 申込倍率

上場数量に対する申込倍率は、23年産の申込限度いっぱい1.45倍(1回目、2回目ともに1.45倍)に対し、24年産は1.39倍(1回目1.45倍、2回目

1.33倍)となり、23年産に比べ低下したものの引き合いの強いものであった。

イ 落札数量・不落札数量

申込数量が申込限度いっぱいとはいかなかったものの高い申込倍率となったことから、23年産には及ばなかったものの極めて高い落札結果

表-6 入札結果

産地銘柄	販売 予定 数量 トン	購入 希望 倍率 %	上場 数量 トン	基準 価格 円/ トン	計				第1回目				第2回目		
					落札 価格 円/ トン	値上率 %	不落札 数量 円/ トン	申込 倍率 %	値上率	不落札 数量	申込 倍率	値上率	不落札 数量	申込 倍率	
日本麺用															
きたほなみ	591,175	0.84	177,360	57,332	56,548	98.6	2,240	1.2	102.1	0	1.3	95.0	2,240	1.0	
シロガネコムギ															
兵庫	2,912	1.14	870	50,753	47,613	93.8	60	1.0	94.0	0	1.2	93.6	60	0.9	
福岡	26,262	0.86	7,880	53,813	54,314	100.9	0	1.3	101.1	0	1.3	100.7	0	1.4	
佐賀	28,439	0.79	8,500	47,623	50,093	105.2	110	1.6	104.0	60	1.2	106.4	50	1.9	
農林61号															
茨城	5,100	1.12	1,530	36,303	32,698	90.1	260	1.0	90.1	140	0.8	90.0	120	1.1	
栃木	837	1.51	200	49,556	45,197	91.2	0	1.8	91.3	0	1.6	91.1	0	2.0	
埼玉	17,316	0.90	5,200	49,946	47,540	95.2	660	0.9	96.1	470	0.8	94.4	190	0.9	
岐阜	4,038	1.06	1,210	43,620	47,982	110.0	0	3.1	110.0	0	3.0	110.0	0	3.3	
愛知	8,658	1.45	2,600	48,971	53,867	110.0	0	2.8	110.0	0	2.3	110.0	0	3.3	
三重	3,890	1.59	1,170	45,071	49,562	110.0	0	2.4	109.9	0	2.3	110.0	0	2.5	
滋賀	13,732	1.22	4,110	53,359	57,869	108.5	0	1.9	108.1	0	1.7	108.8	0	2.2	
チクゴイズミ															
福岡	21,438	1.17	6,340	60,865	65,699	107.9	0	1.8	105.9	0	1.7	110.0	0	1.9	
佐賀	16,985	1.17	5,090	53,655	59,021	110.0	0	3.5	110.0	0	2.9	110.0	0	4.0	
大分	3,639	0.92	1,900	51,693	56,862	110.0	0	3.8	110.0	0	3.8	110.0	0	3.8	
さとのそら															
茨城	8,606	0.37	2,580	36,303	32,752	90.2	1,710	0.3	90.5	970	0.3	90.0	740	0.4	
群馬	18,906	0.85	5,670	56,021	52,417	93.6	620	0.9	93.8	180	0.9	93.3	440	0.8	
イワイノダイチ															
岐阜	3,530	1.22	1,060	41,388	45,526	110.0	0	3.3	110.0	0	3.0	110.0	0	3.5	
愛知	8,088	1.12	2,430	47,233	50,928	107.8	0	2.3	106.7	0	1.8	109.0	0	2.9	
つるびかり 群馬	5,390	0.98	1,620	49,036	48,364	98.6	0	1.7	97.6	0	1.2	99.7	0	2.1	
さぬきのゆめ 2000 香川	3,476	1.51	1,040	61,762	66,793	108.1	0	1.6	106.3	0	1.7	110.0	0	1.6	
シラネコムギ 宮城	2,531	1.36	760	40,638	41,858	103.0	0	1.7	103.0	0	1.5	103.0	0	1.8	
きぬの波 群馬	1,801	1.40	540	55,052	59,731	108.5	0	2.9	107.0	0	2.4	110.0	0	3.4	
パン用															
春よ恋 北海道	24,198	1.20	7,260	116,467	128,114	110.0	0	2.4	110.0	0	2.2	110.0	0	2.5	
キタノカオリ 北海道	5,751	1.60	1,730	84,613	93,074	110.0	0	2.1	110.0	0	2.0	110.0	0	2.2	
ゆめちから 北海道	3,785	3.17	1,070	84,613	93,074	110.0	0	6.9	110.0	0	4.9	110.0	0	8.9	
ミナミノカオリ 福岡	6,814	1.36	1,990	50,484	55,293	109.5	0	2.1	109.1	0	1.7	110.0	0	2.6	
計			250,980	57,966	58,340	100.6	5,660	1.4	103.0	1,820	1.4	98.2	3,840	1.3	

(註) 基準価格、落札価格は、消費税込価格。申込倍率が1.0以上で不落札があるのは、売手が複数あってそのうちの一方が申込倍率が1.0を下回って生じたもの。

となった。

1回目が126千トンの上場数量に対して124千トンが落札、不落札18百トン、落札率98.6%、2回目が125千トンの上場数量に対して121千トンが落札、不落札38百トン、落札率96.9%、

全体で251千トンの上場数量に対し245千トンが落札、不落札56百トン、落札率97.7%であった。

ウ 落札価格

全銘柄の落札加重平均価格(税込み)は、1回目は59,736円/トンで基準価格に比べ3.0%高、2回目は56,919円/トンで基準価格に比べ1.8%安と、小幅に上げ下げしたが、1・2回を含めた全体では2回目が値下がりしたので値上げ幅は0.6%高に縮小した。

1回目の入札は、昨年の入札において決まった国内産小麦の輸入麦の政府売渡価格に対する価格関係を、最近の国内産小麦やASWの需給関係の下でどう探るかであったわけであるが、上場した26産地銘柄中、値下がりした銘柄は7銘柄で、残りの19銘柄は値上がりし、このうち9銘柄は上限に張り付き極めて引き合いの強いものであった。

2回目は、値下がりした銘柄は8銘柄で、18銘柄が値上がりし、このうち上限に12銘柄が張り付いた。申し込み倍率が1回目(限度いっぱい)の1.45より1.33と低かったにもかかわらず価格的には過熱感があった。

全体(1、2回加重平均)では、58,340円/トンで基準価格の57,966円/トンを374円(+0.6%)とわずかに上回っただけであったが、価格水準事態は、基準価格が事後調整されているので民間流通始まって以来の最高水準となった。

1、2回目ともに上限に張り付く銘柄が多かった割には全体的な値上がり率が、1回目は+3.0%と低く、また、2回目は1.8%安、1・2回加重

平均でも+0.6%と低くなったのは、上場数量251千トン中177千トン(71%)を占める北海道産「きたほなみ」の値動き(1回目 102.1%、2回目 95.0%)によるところが大きい。

産地銘柄別にみると、引き合いの強い中で24年産もパン用小麦は健闘した。24年産は北海道産「ゆきちから」が新規上場し4産地銘柄が上場したが、北海道産「春よ恋、キタノカオリ、ゆきちから」は上限の+10%、福岡県産「ミナミノカオリ」は、+9.5%と上限に張り付いた。春よ恋の価格は、128,114円/トンと驚くべきものとなったこともあって、入札倍率は昨年より若干減少はしたものの依然として根強いものがあった。

日本麺用の小麦も健闘する銘柄が多かった。最近健闘しているチクゴイズミ「佐賀、大分県産」をはじめ、農林61号「岐阜、愛知、三重県産」、岐阜県産「イワイノダイチ」の6銘柄が+10%の上限価格となるとともに、滋賀県産「農林61号」、群馬県産「きぬの波(関東以北で唯一値上がり)」が+8.5%、昨年大きく下げた香川県産「さぬきの夢2000」が+8.1%、福岡県産「チクゴイズミ」が+7.9%、愛知県産「イワイノダイチ」が+7.8%と東海以西の産地銘柄が大きく値を上げた。

反面値を下げるものもあった。農林61号「茨城(-9.9%)、栃木(-8.8%)、埼玉(-4.8%)」、さとのそら「茨城(-9.8%)、群馬県産(-6.4%)」で、関東産に値を下げるものが多かった。

上場数量の70%を占める北海道産「きたほなみ」は-1.4%で微調整にとどまった。

極めて、引き合いの強い入札結果となったが、国内産小麦の3年連続の不作等により国内産小麦の需給に逼迫感ある中で、入札において関東産の申込が減少したことも過熱化に拍車がかかった。

6 相対取引

24年産の相対取引は、去る11月4日に生産者団体から各実需者に提示され、これにより相対取引が開始された。相対取引数量は、販売予定数量948千トンから落札数量245千トンを差し引いた残りの703千トンとなった。各実需者からの申込を受け12月中には全数量の結びつきを終えたい意向で取り進められている。

7 終わりに

24年産の入札は、「23年産の落札加重平均価格を輸入麦の政府売渡価格の変動率で調整した価格」を「入札基準価格」とした初めての入札であった。

すなわち、国内産小麦の相場に国際相場を取り入れたうえで国内産小麦の入札を行うこととするものであるが、国内産小麦の入札には、上限・下限の価格制限措置はあるものの、調整される基準価格は価格決定ルールに上・下限価格の設定のない輸入小麦の政府売渡価格の変動率で調整されるため、国内産小麦の価格は今後は年々大きくふれることになる。

24年産は、基準価格が18.5%と大幅に調整された。この価格を基準に上限価格に張り付いた9銘柄は、23年産の入札結果に比べ30%値上がりしたことになった。全体の加重平均価格は、+0.6%の値上がりで、この変動幅については各生産・実需者においていろいろ意見のあるところであろうが、23年産水準に留まったと言えなくもない。しかし、この水準は、加重平均価格でありこの価格で全国から手当てをする実需はなく、各産地の価格が実需者の価格となる。

そういう意味では、非常に厳しい入札結果となってしまったと言える。

従来は価格決定方式は、安定価格によって取引の安定を図ろうとするものであったといえる

が、変動相場制の導入によって、国際相場の変動によって価格が大きく振れる中で、いかに安定的な取引を図るか、難しい課題をかかえてしまった。

25年産の取引の仕組みのあり方については、まもなく検討が開始されるものと考えているが、取引の前提が大きく変化した中で、「取引の仕組み」がどうあるべきか基本的なところから議論を始める必要があるのではないかと考えている。

(製粉協会 参与)

麦制度の改正による港湾業務の現状と課題 (本船の大型船化による諸問題)

深尾 祐一

平成22年10月4日(月)午前11時10分、即時販売方式に移行後千葉港に初入港する、1CW積来本船‘DANNAN ISLAND’号が接岸した。この船はいわゆるパナマックス船(注:パナマ運河を航行できる最大級の船型)。伊藤忠商事が買付けたカナダ産小麦、大麦の積み合わせ。正に、新制度による小麦本船の大型船化の流れを象徴するものであった。

即時販売方式への制度変更は、平成20年11月から平成21年10月まで計12回開催された「輸入麦の政府売渡ルール検討会」の答申を受けて平成22年10月からの実施となった。その間、平成22年度には農林水産省の組織変更の方針決定がなされ、農政事務所から地域センターへの組織変更がおこなわれることになった。即時販売方式の制度設計はこの組織変更を前提に実施された。新制度下では農政事務所は港湾業務に関与しないことになり、平成22年9月末をもって、政府在庫は民間備蓄に移行し、一挙に実需者に所有権移転がなされた。‘DANNAN ISLAND’号は移行後の第1船として、関係者の注目を集めるなか到着したものである。

あれから、丁度1年が経過し、新制度移行による様々な変化が明らかになってきているので港湾現場の状況をご紹介します。

1)本船大型船化の現状

大型船化による港湾業務への影響は、直接、間接に発生している。

(表1)は平成22年度の食料用輸入麦(小麦、大麦)の港別輸入実績を4~9月(旧制度)と10~3月(新制度)に区切って対比した表である。(輸入食糧協議会発行、輸入食糧実績表を加工した) 4~9月には延べ377隻(1船/2港揚げ、1船3港揚げは延べ隻数でカウント)、1隻/港あたり7,348トン、10~3月は延べ238隻、1隻/港あたり10,894トンとなり、平均荷役数量は1隻/港あたり5割増となった。

4~9月実績で官貿本船46隻が入港し、1隻あたりの荷役数量は7,441トンであったが、10~3月は官貿本船25隻となり、本船数は大幅に減少したが、1隻あたりの荷役数量は14,118トンと9割増となった。全国平均と比べると、4~9月はほぼ同じレベルであったが、10~3月には全国平均を大幅に超える実績となった。荷役日数は、4~9月は75日、10~3月は65日となり、10日間の減。1日あたりの平均荷役数量は、4~9月は4,563トン、10~3月は5,430トンと2割増となっている。4~9月に入港した46隻のうち、ハンディ船(20,000トン~30,000トン)が36隻、ハンディマックス船(40,000トン)10隻。これに対し、新制度に移行した10月~3月に入港した25隻は、ハンディ船2隻、ハンディマックス船21隻、パナマックス船2隻と大型船化が顕著になっている。

表1 平成22年度食糧用麦(小麦、大麦計)港別実績

1)平成22年4月～平成22年9月

輸入港名	揚数量(M/T)		回漕数量(M/T)		数量合計(M/T)	
1)小樽	35,968	1%		0%	35,968	1%
2)函館	23,061	1%		0%	23,061	1%
3)仙台塩釜	6,746	0%		0%	6,746	0%
4)新潟	3,338	0%	1,400	1%	4,738	0%
5)鹿島	124,432	5%		0%	124,432	4%
6)千葉	526,319	20%	1,287	1%	527,606	19%
7)東京	147,576	6%		0%	147,576	5%
8)横浜	353,713	13%	20,145	21%	373,858	13%
9)清水	82,654	3%		0%	82,654	3%
10)名古屋	319,996	12%	3,774	4%	323,770	12%
11)四日市	22,961	1%		0%	22,961	1%
12)衣浦	3,390	0%	930	1%	4,320	0%
13)大阪	114,510	4%	41,580	43%	156,090	6%
14)神戸	386,542	14%	9,767	10%	396,309	14%
15)姫路	6,180	0%		0%	6,180	0%
16)水島	47,425	2%	1,500	2%	48,925	2%
17)坂出	69,634	3%		0%	69,634	3%
18)広島	23,690	1%		0%	23,690	1%
19)博多	344,617	13%	15,212	16%	359,829	13%
20)八代	12,668	0%		0%	12,668	0%
21)鹿児島	19,343	1%		0%	19,343	1%

合計	2,674,763	100%	95,595	100%	2,770,358	100%
				隻数	377	
				1本船・1港当たり数量	7,348	

2)平成22年10月～平成23年3月

輸入港名	揚数量(M/T)		回漕数量(M/T)		数量合計(M/T)	
1)小樽	43,566	2%	3,500	1%	47,066	2%
2)函館	8,682	0%	613	0%	9,295	0%
3)鹿島	74,608	3%	31,086	9%	105,694	4%
4)千葉	485,161	21%	79,889	24%	565,050	22%
5)東京	135,741	6%	2,541	1%	138,282	5%
6)横浜	403,888	18%	36,817	11%	440,705	17%
7)清水	57,567	3%	1,500	0%	59,067	2%
8)名古屋	261,903	12%	39,194	12%	301,097	12%
9)大阪	150,244	7%	27,554	8%	177,798	7%
10)神戸	333,908	15%	60,158	18%	394,066	15%
11)水島	5,183	0%	7,847		13,030	1%
12)坂出	58,380	3%		0%	58,380	2%
13)博多	225,671	10%	35,798	11%	261,469	10%
14)八代	8,240	0%		0%	8,240	0%
15)鹿児島	12,577	1%	1,029	0%	13,606	1%

合計	2,265,319	100%	327,526	100%	2,592,845	100%
				隻数	238	
				1本船・1港当たり数量	10,894	

2) 本船大型船化による商社のメリット

小麦の実需者は全国に分散して立地しているため、旧制度下においては、政府が20,000トン～30,000トンの船で、那覇など一部の港を除き全国の港に本船を配船していた。新制度では、商社が最終目的港への運送手段を自らのリスク&アカウントで選択できるようになった。そのため、商社はフレイトメリットを取る目的で、大型船を配船する傾向が強くなってきた。これまで、地方港では農政事務所の裁量により一定以上の数量にまとめ、数ヶ月毎に本船を入港させるやり方も取ってきたが、新制度では需要家の大小を問わず、単月の買付申し込みを買付の4ヶ月前におこなうことになった。商社は大型船を主要港に付け、地方港へは内航船、舢舨等で回漕させることでコストダウンを図ることが主流になっている。

3) 回漕数量の急増

麦(食料用小麦、大麦)の輸入では、千葉、横浜、神戸、名古屋、博多が5大港となっている。平成22年4～9月のシェアは5港合計で71%となっている。(表1)

新制度に移行した平成22年10月～平成23年3月には5港のシェアは76%と5ポイントの増加となった。この要因は回漕数量の増加によるものである。4～9月の回漕数量は、全国合計で95,595トン、全体の3.5%であったが、10～3月は327,526トンと全体の12.6%が回漕となった。4～9月の回漕のうち大阪が第1位、41,580トン、48%を占めているが、これは阪南地区への回漕である。大阪以外は、沖縄回漕など従来からおこなわれていた地方港への内航船回漕と、SBS制度による小麦、大麦の回漕である。小麦が新制度に移行した10～3月には、回漕数量が急増、千葉が第1位、79,889トン、24%となり、2位神

戸、60,158トン、18%、3位名古屋、39,194トン、12%と続き、5大港からの回漕数量シェアは荷役数量シェアと同じ76%になった。このことは、大型船化により、主要港への配船集中を示す結果となっている。

回漕数量の増大は、想定外の問題ももたらした。旧制度下では、長年本船通関が認められていたが、倉通関に移行したことが遠因となり回漕先でのオーバー、ショートの問題がクローズアップされることになった。なかでも5%超のオーバーが発生すると、通関時に関税を支払わねばならないことになり、それを避けるために回漕先で生じたオーバー分を主要港に回送する事態が頻発している。

4) 夜荷役の増加

新制度下においては、商社オーダーによる夜荷役が増加している。旧制度時代は、官賃本船の夜荷役は、船混みなどの農政事務所が認めた例外的なものだけであった。見方を変えれば、農政事務所の指示により荷捌きが行われるため、企業努力による効率的な荷役計画の策定の限界があったということである。夜荷役だけでなく、例えば、本船荷役最終日の12時に荷役終了予定であり、次船が待っている場合でも次船の午後の荷役手配はおこなわず、荷役開始は翌日からとなるのが通例であった。

一方、新制度に移行後の10～3月の夜荷役は、42,000トンと約10倍に急増している。前船が12時に終了するような場合では、次船の荷役について商社との合意がなされれば、午後からの荷役開始も可能となった。旧制度下では午後7時以降の夜荷役は、よほどの異例な事態がない限り認められなかったが、新制度では、商社との合意さえあればオールナイト荷役も可能になった。このことは、新制度により荷役効率が上が

っていることの証明ではあるが、人員配置の面も含めこれまで以上にフレキシブルな対応を求められることになる。

5) 在庫数量の増減幅拡大

大型船化による船数の減少と1船あたりの数量増加は、在庫数量の増減幅の拡大につながっている。10～3月は北米積地での複合的な要因により、本船の入港遅延が恒常的となったため、大型船の千葉港1港揚げという新たな荷捌形態が発生した。従来であれば、20,000トン、30,000トンの3港揚げが標準的な荷捌であったため、本船ローテーションを東廻りまたは西廻りにすることにより、船混みを調整することが可能であった。大型船の1港揚げになるとそのような調整ができなくなり、本船輻輳時の調整が困難となっている。サイロスペースの面でも1度に50,000トン以上を準備しなければならないことになり、スペース不足の局面では本船を滞船させざるを得ない事態が発生することになる。また、50,000トンの揚げ荷役は最低でも7日間要することになり、先船優先の原則に立つと、後船の荷捌きが困難になるケースも見られた。

6) 秋口より発生しているサイロスペースの逼迫

新制度への移行後は、船積み遅れ基調が常態化し、在庫数量も下ぶれで推移してきたが、8月後半からは大型船が相次いで入港することにより、俄にサイロスペース逼迫という事態になっている。この原因は、①買付数量が7月積み以降増加したこと、②7月積みまでは積地の滞船による出港遅延があったが、8月積み以降は順調に出港してきたことにより、大型船が輻輳したこと、③7月以降出荷ペースが落ちていること、の3点が挙げられる。そのため、当社のサイロスペースも逼迫、サイロスルーでの回漕が困難な

状況となっている。10月以降も早到着の本船が予定されており、在庫数量が落ち着くのは11月後半以降と予測している。

7) 東日本大震災による鹿島港以北の穀物サイロの代替保管

平成23年3月11日(金)の東日本大震災では、鹿島港以北の穀物サイロは津波による大きな損害を被りました。本船が接岸し荷役中であったところは、停電によりアンローダが本船船倉内に入った状態で津波が襲来し、津波の引き波で本船が沖に引っ張られた時にアンローダも破損するという事故が多発したようです。被害に遭われ、まだ復旧中の各社様にはお見舞いと一日も早い完全復旧を願っております。

鹿島港は年間400万トンを超える穀物が輸入される日本最大の穀物輸入基地ですが、大震災により本船が接岸する3バース(昭和産業、全農サイロ、関東グレーンターミナル)の全てが津波の被害を蒙った。その一方、後背地にある配合飼料メーカーの津波の被害は軽微であったため、いち早く操業可能な体制になった。また、鹿島港は港の被害とは別に、福島第1原発事故により外航船の寄港拒否といった風評被害も発生した。3月中旬以降、鹿島港に向かっていた飼料原料を積んだ本船の代替港として、千葉港、京浜港に商社よりの問合せが殺到した。鹿島の配合飼料メーカーは3月20日過ぎには操業可能な状態に復旧し、飼料原料(コーン、マイロ、大豆粕)の供給開始を急がれた。当初は、車両、軽油の不足が懸念されたが、商社、運輸会社各社の協力により緊急輸送体制が敷かれ、3月26日からトラックによる出荷が始まった。(表2)

多い日には1日100台超のトラックにより輸送されたが、当社前には早朝からトラックが列をなし、列の最後尾が公道にまで及ぶこともあっ

表2 鹿島港へのとうもろこし出荷

船名	PEQUT		船名	NIKOLAOS A	
搬入数量	15,003.160	t	搬入数量	11,002.810	t
内航船	960.000	t	内航船	1,500.000	t
トラック	14,043.160	t	トラック	9,502.810	t
トラック台数	894	台	トラック台数	544	台
			トラック総合計	1438	台

日別出荷台数

日付	日別台数	日付	日別台数	日付	日別台数	日付	日別台数	日付	日別台数	日付	日別台数
3月25日	0	4月1日	63	5月1日	0	6月1日	1	7月1日	1	8月1日	1
3月26日	3	4月2日	57	5月2日	0	6月2日	0	7月2日	1	8月2日	1
3月27日	0	4月3日	0	5月3日	0	6月3日	3	7月3日	0	8月3日	1
3月28日	10	4月4日	63	5月4日	0	6月4日	0	7月4日	1	8月4日	0
3月29日	12	4月5日	36	5月5日	0	6月5日	0	7月5日	1	8月5日	0
3月30日	14	4月6日	54	5月6日	1	6月6日	0	7月6日	1	8月6日	0
3月31日	73	4月7日	46	5月7日	1	6月7日	1	7月7日	1	8月7日	0
3月小計	112	4月8日	64	5月8日	0	6月8日	1	7月8日	1	8月8日	0
		4月9日	71	5月9日	1	6月9日	1	7月9日	0	8月9日	0
		4月10日	0	5月10日	2	6月10日	1	7月10日	0	8月10日	0
		4月11日	35	5月11日	0	6月11日	0	7月11日	1	8月11日	0
		4月12日	71	5月12日	1	6月12日	0	7月12日	1	8月12日	0
		4月13日	65	5月13日	0	6月13日	1	7月13日	1	8月13日	0
		4月14日	100	5月14日	0	6月14日	1	7月14日	1	8月14日	0
		4月15日	78	5月15日	0	6月15日	1	7月15日	1	8月15日	0
		4月16日	15	5月16日	0	6月16日	1	7月16日	1	8月16日	0
		4月17日	0	5月17日	0	6月17日	1	7月17日	0	8月17日	0
		4月18日	22	5月18日	0	6月18日	2	7月18日	0	8月18日	0
		4月19日	58	5月19日	0	6月19日	0	7月19日	1	8月19日	0
		4月20日	98	5月20日	0	6月20日	0	7月20日	1	8月20日	0
		4月21日	90	5月21日	0	6月21日	2	7月21日	1	8月21日	0
		4月22日	49	5月22日	0	6月22日	0	7月22日	1	8月22日	0
		4月23日	14	5月23日	0	6月23日	1	7月23日	0	8月23日	0
		4月24日	0	5月24日	0	6月24日	1	7月24日	0	8月24日	0
		4月25日	20	5月25日	46	6月25日	1	7月25日	1	8月25日	0
		4月26日	29	5月26日	1	6月26日	0	7月26日	1	8月26日	0
		4月27日	23	5月27日	2	6月27日	1	7月27日	1	8月27日	0
		4月28日	0	5月28日	0	6月28日	1	7月28日	2	8月28日	0
		4月29日	0	5月29日	0	6月29日	2	7月29日	0	8月29日	0
		4月30日	0	5月30日	0	6月30日	0	7月30日	0	8月30日	0
		4月小計	1,221	5月31日	1		0	7月31日	0	8月31日	0
				5月小計	56	6月小計	24	7月小計	22	8月小計	3

表3 東北地区製粉等へのトラック出荷(平成23年3月21日～9月20日)

A製粉	5,396	t	232台
B製粉	810	t	32台
C製粉	2,609	t	102台
D味噌醤油組合	1,623	t	89台
E製粉	765	t	45台
合計	11,203	t	500台

た。このような状況も鹿島港のサイロ会社3社の驚異的な復旧により、4月中には鹿島港の3バースに本船が入港可能になったこともあり、代替保管、出庫は4月中に終了した。

仙台港サイロの被災状況は、鹿島以上に深刻な状況でした。そのため当社に、仙台港サイロから引き取っていた東北地区の製粉各社から原料の代替保管の要請があり仙台港サイロが復旧する9月までの半年間、代替出荷を行った。(表3)

9月8日に八戸で開催された、(社)日本倉庫協会のサイロ委員会では、東日本大震災で津波の被害を被った八戸、鹿島、仙台港の被災と復旧までの道のりなどが報告され、改めて穀物サイロの地震、津波対策の重要性を考えさせられ

た。阪神大震災では直下型地震による被災であったが、今回は八戸から鹿島まで広範囲にわたる津波による被災となり、輸入穀物に依存する我が国の生命線とも言うべき穀物サイロの機能と重要性を再認識させられた。

8)おわりに

穀物サイロ業界は、おおよそ50年弱の歴史のなかで、設備の老朽化対策等課題を抱えております。大変厳しい環境ではありますが、今後も製粉業界の発展に寄与すべく研鑽を積んでゆく所存ですので、引き続きご指導のほどよろしくお願ひします。

(千葉共同サイロ株式会社 取締役)



フード・コミュニケーション・プロジェクト(FCP)について

農林水産省 食料産業局 企画課 食品企業行動室
フード・コミュニケーション・プロジェクト事務局

フード・コミュニケーション・プロジェクト(略して「FCP」と呼んでいます)は、消費者の皆さんの食に対する信頼を向上するため、農林水産省が、平成20年度から食品事業者の皆さんや、関連事業者の皆さんに参加を呼び掛けて、「協働」で進めている取組です。まじめに努力している食品事業者の皆さんがキチンと評価される社会を作っていこうというのがFCPです。

2010年3月号(NO.519)では、取組の概要について紹介させていただきましたが、本稿では、あらためてFCPの基本的な考え方をご紹介させていただき、今年度のプロジェクトの活動や「製粉振興」の読者の皆さまにご利用いただけるツール(道具)をご紹介させていただきます。

1. FCPの基本的な考え方

FCPでは、消費者の信頼を得るために重要な食品事業者の行動を体系的に整理し、適正な評価が実現されるための関係者の「共通言語」として、「協働の着眼点」を作成しています。食品事業者が、消費者の信頼向上のための取組(お客様対応、食品の品質管理のための取組等)に関する情報を、効率的にやり取りするための枠組みを整え、全体として透明性を高める基盤とすることとしています。

「協働の着眼点」を活用して、意欲的な食品事業者が、消費者の信頼向上に向けた取組を実施していただき、それらの取組が取引先や消費者等に適正に評価される機会を増やすことによ

って、更なる取組の充実を促す「情報の好循環」を目指しています。

また、プロジェクトを進めていく上で、民間活動を重視するという観点から、農林水産省が基本方針を掲げ、これに賛同して自主的に参画していただくという方式を採用しています。農林水産省が食品事業者をはじめとする「食」に携わる関係者の方々とともに「協働」して進めていくスタイルと言えます。

この「協働の着眼点」における、「協働」には利害が相反することも多い多様な関係者が「食」に対する消費者の信頼を高める」という目標を共有し、ともに力を合わせて活動するという意図が込められています。また、FCPの“C”、「コミュニケーション」という言葉の意味するとおり、さまざまな関係者が同じ土俵に立って情報のやり取りができるように、目の付けどころを揃えるという意味から「着眼点」という名称になっています。

2. 「協働の着眼点」とこれまでの活動展開 (1) 「協働の着眼点」

FCPでは、平成20年度に「協働の着眼点」を策定しました。作成に関しては、出来る限り多くの事業者に使われるもの、フードチェーンで情報をやりとりする際のスタンダードになるものを作るため、多くの食品事業者さんに幅広く呼びかけ、集まった事業者さんの自主的な参加による作業グループを組織し、42回の会合に、合

計で70社から、延べ約390名の参画を得て策定をしました。

「食に携わる関係者が、それぞれの立場で、また連携して消費者の信頼を高めていくために着目すべきポイント」とは何かについて、実態について詳しい方々の知識や経験を積み上げるといふ方針の下に議論を進め、共通の項目として

参加者で共有できるものを、一覧性のある形で取りまとめました。

協働の着眼点には、全体図としての業種横断版(図1:「協働の着眼点(業種横断版)」の全体図)の他に、製造業、卸売業、小売業の業種別(図2:「協働の着眼点 業種別 製造版(抜粋)」)があります。

協働の着眼点 (業種横断版)		FOOD SYSTEM	
1	お客様を基点とする企業活動の明確化	2	コンプライアンスの徹底
社内に関するコミュニケーション			
3	安全かつ適切な食品の提供を するための体制整備	7	持続性のある関係の ための体制整備
4	調達における取組	8	取引先との公正な取引
5	製造における取組 【製品 品質・食味に関する取組 (80%) 環境・加工に関する取組 (20%)】	9	取引先との情報共有、 「産廃」の取組
6	販売における取組	10	お客様とのコミュニケーションのための体制整備
取引先に関するコミュニケーション			
11	お客様からの情報の 収集、管理及び対応	12	お客様への情報提供
緊急時に関するコミュニケーション			
13	災害時の対応	14	緊急時を想定した 自社体制の整備
15	緊急時の自社と取引先との 協力体制の整備	16	緊急時のお客様とのコミュ ニケーション体制の整備

図1:「協働の着眼点(業種横断版)」全体図

① 「協働の着眼点」の特徴

「協働の着眼点」には以下のような特徴があります。

- ・ **自社と他者の関係に着目したカテゴリー設定**
「協働の着眼点」では、食の信頼向上に向けたコミュニケーション上のポイントを分かりやすく整理するために、「自社(社内)」と「他者(取引先、お客様)」の関係に着目したカテゴリーを設定しています。
- ・ **緊急時の対応に関する取組の強調**
消費者をはじめとする関係者に対する信頼構築の上で極めて重要となる事件・事故への対応について、「緊急時の対応」としてポイントを明示しています。

② 「協働の着眼点」の基本的な使い方

食品事業者の方々にとっての、「協働の着眼

点」そのものの基本的な使い方としては、次の三つが挙げられます。

- ・ **「読む」**: 食品事業者の皆さんが、自らの取組や取引先等の取組の具体的な内容について「協働の着眼点」を読んで照らしあわせることにより、気づきを得る。
- ・ **「書く」**: 食品事業者の皆さんが、「協働の着眼点」の各項目に対応して、自らの取組や取引先等の取組の具体的な内容を記述することにより気づきを得るとともに、自社の取組を評価し、改善につなげる。
- ・ **「見せる」**: 「協働の着眼点」の項目に沿って記述した内容を、社内又は取引先等に見せ、自社の取組を効果的に説明したり、評価を受ける。



図2：協働の着眼点 業種別 製造版(抜粋)

「協働の着眼点」の詳細内容につきましては、プロジェクトのHP内にある以下URLをご参照下さい。
 (http://www.food-communication-project.jp/aim/index.html)

(2) これまでの活動展開について

① 情報共有ネットワークを構築

農林水産省では、FCPの基本的な考え方に賛同する食品事業者(製造、卸売、小売等)、地方公共団体、金融機関等の皆さんとの間でネットワークを構築しています。平成20年6月から募集開始し、平成23年10月末の時点では約1,100の

企業又は団体の皆さんに参画して頂いています。(図3：情報共有ネットワークへの参加)

この情報共有ネットワークは、参加者の皆さんに対して定期的にFCPの活動状況を情報提供するとともに、「協働の着眼点」を活用して食品事業者の意欲的な取組を活性化する研究会への参加を呼びかけています。

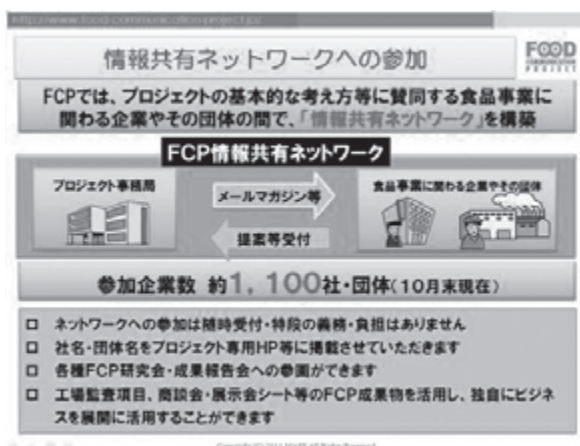


図3：情報共有ネットワークへの参加

② FCP研究会活動

FCP研究会活動は、FCPの基本的な考え方に基づき、「協働の着眼点」の活用方法の研究や、活用事例の収集と普及を目的に情報の共有と意見交換を行う場と位置付けています。平成23年度は、「協働の着眼点」の活用に関する研究活動として、

- ・「FCP事務局が食品事業者等の皆様に参加を呼び掛けるタイプ(事務局運営)の研究会
 - ・「食品事業者等の皆様が主催する研究活動の運営を事務局がサポートするタイプの研究会
- の二つのタイプの研究会を立ち上げて、食品業界におけるスタンダードとしてFCPの仕組みをさらに広げるための研究会活動を行っています。

FCP事務局が食品事業者等の皆様に参加を呼び掛けるタイプの研究会としては、「消費者との対話のあり方研究会」、「工場監査項目の標準化、共有化研究会」、「商品情報の効率的なやり取りに関する研究会」、「企業力向上の場としてのマッチング・商談会の活用に関する研究会」があり、現在、研究会を開催しているところです。

(図4：平成23年度 FCP研究会活動)

研究会の概要を簡単にご紹介させていただきますと、「消費者との対話のあり方研究会」では、消費者のニーズを把握、分析しながら、食品事業者の相互信頼を構築するコミュニケーションのあり方について事例をもとに研究を行っています。また、「工場監査項目の標準化・共有化研究会」では、FCP共通工場監査シートを、用途別、目的別に選択できるようにする、シート自動生成プログラムを作成し、より使いやすい工場監査シートを目指して研究を行っています。そして、「商品情報の効率的なやり取りに関する研究会」ではフードチェーン全体で情報共有の手段を研究しております。情報管理体制に関する

情報をやりとりすることで、実際にやりとりする情報項目の量の回数を減らせるのではないかとこの仮説にもとづき研究を進めております。最後に、「企業力向上の場としてのマッチング・商談会の活用に関する研究会」においては、「FCP展示会・商談会シート」を作成する事業者の皆さんが、作成する際に参考となる手引き書の作成などについて研究を行っています。(図5：研究会活動の様子)また、食品事業者等の皆様が主催する研究活動の運営を事務局がサポートするタイプの研究会としては、「FCP普及・戦略研究会」、「FCPアセスメント研究会」(開催予定)があります。「FCP普及・戦略研究会」では、FCPの自立的展開を促すために、広義な意味も含めた「普及のあり方や普及方法」に関わる研究と実践的取組を行うことを、目的として東京大学大学院食の安全研究センター中嶋康博副センター長、オラクルひと・しくみ研究所小阪祐司代表、(株)アール・ピー・アイ長澤博英代表取締役社長を発起人とし、アール・ピー・アイを運営事務局として情報共有ネットワークの皆様に参加を呼びかけ活動しております。

本年度の研究会では、次の5つの研究テーマ・活動を設定し、議論が進められております。

- ・食の信頼回復・向上のためのシステムの開発と評価
- ・消費者との対話手法の開発と評価
- ・食の事件・事故の風評被害等に関する影響評価
- ・「食の信頼論」についての検討
- ・出版活動等による普及啓発

併せて、「協働の着眼点」を活用した食品事業者の取組事例に関する情報を広くご提供いただき、意見交換を行うとともに、「協働の着眼点」をより良いものに見直すための情報の提供、改善に向けた提案をしていただく予定です。

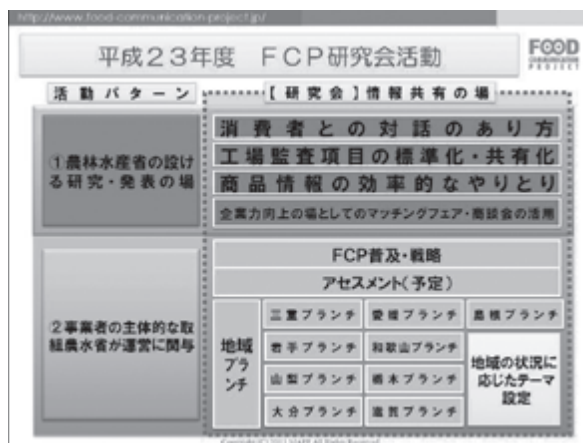


図4：平成23年度 FCP研究会活動



図5：研究会活動の様子

各研究会の詳細内容につきましては、プロジェクトのHP内にある以下URLをご参照下さい。(http://www.food-communication-project.jp/study/)

③ 地方公共団体の主体的な取組としての「地域ブランチャ活動」について

地域ブランチャ活動とは、FCPの仕組みを活用して、地域独自の課題に取り組み、地場の食品産業の活性化につなげる活動です。都道府県から、独自のテーマ、手法での活動の提案を受け付け、農林水産省FCP事務局が連携して活動をサポートします。

平成22年度までに、岩手県、三重県、和歌山県、愛媛県がブランチャを立ち上げました。平成23年度は、栃木県、山梨県、滋賀県、鳥根県、

大分県が新たにブランドを立ち上げ、これまでの4県と合わせて9県が、FCPの仕組みを活用して、地域独自の課題に取り組み、地場の食品産業の活性化につなげる活動をしています。地域ブランチャ活動を通して、栃木県は岩手県から研究会開催についてのアドバイスを受けたり、大分県では和歌山県の取組を参考にするなど、各県がお互いの取り組みを知り、活動の参考にするなど、連携の輪が生まれています。(図6：地域ブランチャの活動)



図6：地域ランチの活動

3. ツールの紹介

前述のFCP研究会活動などを通じて開発したツールの一部をご紹介します。

(1) ベーシック16

FCPでは、「協働の着眼点」の基本的な考え方をまとめ、「ベーシック16」を策定しました。この「ベーシック16」は「協働の着眼点」の大項目16項目に即して構成されており、製造、卸売、小売の業種を超えて食品事業者が自らの行動のポイントを項目毎に書き出して、企業の取組の振り返り、取組の改善、企業の取組PR等にも活用することができるツールです。(図7：「ベーシック16」の概要)

「ベーシック16」で業務の全体像を振り返りながら、自らの取組を書き込むことは、今の業務の点検と検証につながり、これから重点を置きたい点、改善すべき点が見えてきます。

一方で、やっていることを文章にすることは取引先等との情報のやり取りを円滑にし、キチンとした納得のいく評価を得やすくすることにもつながります。さらに「消費者との信頼を築く」という意味では、消費者に「ベーシック16」で自らの取組をアピールすることも効果的であると考えられます。

企業の取組の振り返り、取組の改善、企業の取組PR等に「ベーシック16」を是非ご活用下さい。

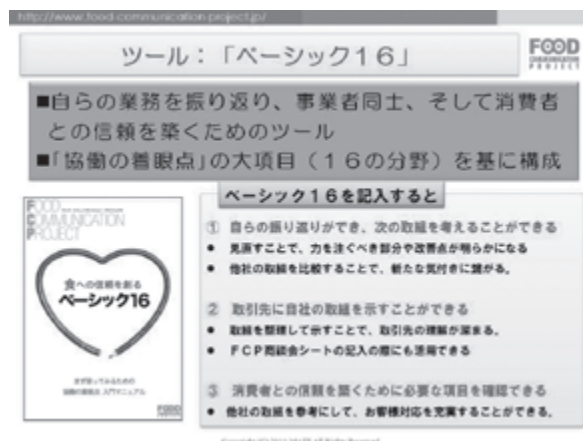


図7：「ベーシック16」の概要

ベーシック16の詳細内容につきましては、プロジェクトのHP内にある以下URLをご参照下さい。
(<http://www.food-communication-project.jp/basic16/>)

(2) FCP共通工場監査項目

FCPでは、既存の工場監査項目のうち、食に関する信頼確保のために実施する項目について、「協働の着眼点」を用いて、標準化・共有化する検討を行っています。これは、工場の監査において、食品事業者が信頼確保のための取組を確認するために、自社や取引先に対して行う(又は自社内や取引先から受ける)工場監査を効率的に進めることができるようにするためです。

平成21年度には「FCP共通工場監査項目(第1.

0版)を作成し、意欲的な食品事業者の方々に使っていただいております。(図8:「FCP共通工場監査項目」(一部抜粋)及びその活用)

平成22年度は監査項目について、どの程度の取組が求められているかの「要求水準」と、その取組を確認するための「監査手法」について取りまとめるための研究活動を行い、「FCP共通工場監査項目(第1.0版)の付属資料として、「FCP共通工場監査項目に関する要求水準及び監査手法」を取りまとめました。

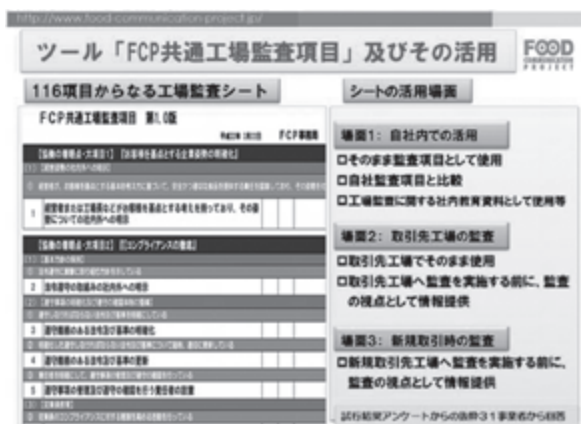


図8:「FCP共通工場監査項目」(一部抜粋)及びその活用

「FCP共通工場監査項目」の詳細内容につきましては、プロジェクトのHP内にある以下URLをご参照下さい。(http://www.food-communication-project.jp/result/index.html#02)

(3) FCP展示会・商談会シート

FCPでは、展示会や商談会において、限られた時間の中で出展者とバイヤー双方が効率的に商談を進めることができるようにするための研究会を開催しています。平成21年度は「協働の着眼点」を利用して、展示会や商談会において、バイヤーと食品事業者の情報のやり取りを効率

化する「FCP展示会・商談会シート」(図9:「FCP展示会・商談会シート」)を開発しました。この「FCP展示会・商談会シート」は全国の各地域で行われている展示会や商談会等(図10:「FCP展示会・商談会シート」の主な活用例)において活用が進んでいます。「FCP展示会・商談会シート」の各項目は「協働の着眼点」とつながってい

ることから、バイヤー側が何故その項目を知りたいと思っているのかということについての説明も紹介されています。記入の際には、「『FCP展示会・商談会シート』作成のてびき(図11:『FCP展示会・商談会シート』作成のてびき)が

あります。作成のてびきは、なぜ「FCP展示会・商談会シート」を作成する必要があるのかメリットを説明し、実際のシートに対し、バイヤーからのアドバイスを紹介するなど、どなたにでもわかりやすいように作成しております。

図9：「FCP展示会・商談会シート」



図10：「FCP展示会・商談会シート」の主な活用例



図11：「FCP展示会・商談会シート」作成のてびき

「FCP展示会・商談会シート」の詳細内容につきましては、プロジェクトのHP内にある以下URLをご参照下さい。(http://www.food-communication-project.jp/result/index.html#01)

4. FCPへのお誘い

FCPでは、引き続き意欲的な食品事業者の方々が自らの取組に関する情報を積極的に開示し、関係者がこれを評価していく、その評価を踏まえて食品事業者の方々が更に取組を充実するという動きを推進していきます。

今年度は、ご紹介したツールをどんどん現場で使っていただきたいと考えています。そのためにも、FCPにご参加いただく事業者の皆さん

の輪を広げていくことが大事になります。FCPは参画型ということで、様々な形でご参加いただけるようになっております。

まずは、情報共有ネットワークへの加入から、全てが始まります。「製粉振興」の読者の皆様におかれても、この機会に是非、FCPの情報共有ネットワークへのご参加をご検討いただければ幸いです。(図12：FCPの詳細について)



図12：FCPの詳細について

情報共有ネットワークのご参加につきましてはプロジェクトのHP内にある以下URLをご参照下さい。(http://www.food-communication-project.jp/network/)

もっと泡とおいしさ

畑 江 敬 子

調理において、泡は良い場合だけでなく、泡のお陰で困ることもある。

ちょっと目を放したすきに、温めていた牛乳が吹きこぼれたり、麺を茹でている途中で、あるいは、小豆を煮ている途中で吹きこぼれたりすることがある。私が、しばしばやってしまうことである。

揚げ物の場合に揚げ油に細かい泡が立って、すぐには消えずいつまでも残ってしまうことがある。この“かに泡”は作業がしにくいばかりでなく、仕上がりに状態にも影響を及ぼし、おいしそうな揚げ物にはならない。

また、煮物などで、落とし蓋をすることがあるが、これも泡立ちと無関係ではない。

牛乳の吹きこぼれ

牛乳の吹きこぼれは、加熱して温度が上がると牛乳の表面張力が低下することが原因の一つである。表面張力は出来るだけ表面の面積を小さくしようと表面に働く力である。液体の表面張力は温度が高くなると下がってくる。

文献(右田、1968)によると、牛乳の表面張力は20℃で56~59(dyn/cm)、45~60℃で42~45、である。水の表面張力は20℃で73、40℃で69、60℃で66である。ということは、水が20℃から40℃になると表面張力は約5%しか低下しないが、牛乳は約25%も低下するということが出来る。

表面張力が低下するという事は界面を

小さくしようとする力が働きにくくなるのであるから、界面の大きい泡が消えにくいことになる。そこで、牛乳は吹きこぼれるというわけである。

牛乳の場合、表面張力を下げるのに役立つ界面活性剤となるのは、タンパク質であるが、他にも界面活性作用のある物を含む場合は泡が立つ。また、液体に粘度があると、いったん立った泡は消えにくくなるので、これも吹きこぼれの原因となる。

揚げ油の泡立ち

揚げ物は食品を油の中に入れて、180℃ぐらいの高温の油に接触した部分で、水分が泡のように蒸発して除かれ、代わりに油が食品に吸収される。つまり、揚げ物とは食品の表面における水と油の交代を利用した調理である。

衣をつけた天ぷらやフライなら衣の部分で水と油の交代が起こるし、衣をつけない素揚げやごく薄い衣しかつけない唐揚げでは食品自体で水と油の交代が起こる。水分が減って油が入ることによって油の味がついたり、衣あるいは食品の口触りがかわったりしておいしくなる。

天ぷらの衣のおいしさを表現するのに“からりと軽い”というが、このような衣は水分が少ない衣である。官能評価によると、3.5%程度のごくわずかの水分の違いを人間は区別して、水分の少ない揚げ物を軽いと評価できることがわかっている(島田ら、1966)。

ところで、油が新しいうちは、揚げ種をいれると、衣あるいは食品から蒸発した水が泡のように出てくるが、揚げ種を取り出すとすぐに消える。しかし、長時間揚げていると、揚げ種を取り出してもすぐには消えず、だんだんこの泡は消えにくくなっていく。

このような油を“疲れた”油として家庭の主婦は着色とともに、揚げ油の使用限界にしている。主婦でなくても食品産業において、持続性の泡のある油は作業がしにくいだけでなく、仕上がり状態にも影響を及ぼす。

この持続性の泡立ちは油の高温加熱による酸化重合物の蓄積が原因とされ、その結果、油の粘度が高まり、泡が消えにくくなる(金田、1970)。

一方、長時間揚げ物に使用しなくても、トンカツを揚げたときには揚げ物開始後まもなく、持続性の泡立ちが見られる。特に卵があると泡立ちがおこりやすい。卵の成分の中には短時間の油との接触で揚げ油に移行すると考えられるのはリン脂質としか考えられない。卵黄の中にはリン脂質が多く含まれ、これが界面活性作用を示し、泡立ちの原因となる(太田、1977)。

カキフライは他の食品よりも特に泡立ちの著しいことが経験的に知られている。実験(鈴木ら、1977)によると、この泡立ちは卵とカキ自身の成分が関わっている。カキの成分として泡立ちの原因となる物は、脂質ではなくて水溶性で、それほど高分子ではない成分であろうとされている。

落とし蓋と泡

泡立ちをうまく利用している例もある。野菜の煮しめや魚の煮付けなどでは、泡立ちを味付けに利用している。野菜の煮しめは少量の煮汁の中で野菜を煮て、出来あが

ったときには煮汁は少ししか残らないように仕上げる。煮汁が少ないのであるから、野菜は全体が煮汁に浸っているとは限らない。これはおでんや含め煮のような、野菜全体がたっぷりの煮汁に浸っている状態で、味が全体にムラなく付く煮物とは異なっている。

野菜が煮汁に浸っていないと煮汁の調味料は野菜には付かない。ジャガイモをその高さの1/2まで浸るぐらいの煮汁の中で加熱すると、煮汁に浸っている部分は味がつくが、煮汁に浸っていない部分にはほとんど味がつかないので、食べたときに味にムラが出来る。

このとき、煮汁の中にはだしや野菜から溶け出したタンパク質や糖などがとけだしている。そのため、このような煮汁は泡立ちやすくなっている。野菜の上に落とし蓋をのせると、泡立った煮汁は野菜の上の方まで泡とともにあがってきて、蓋にぶつかって野菜の上にかかって下に落ちる。煮汁は再び野菜の上の方まで泡とともにあがってきては野菜にかかって落ちることを繰り返す。こうすることによって、煮汁に浸っていない野菜にも、ある程度味を付けることが出来る。

魚の煮付けの場合も同様である。煮汁に浸っていない上身に味をつけるために、魚をひっくり返そうとすると魚の身が崩れてしまう。そこで、落とし蓋をして、上身にも味を付けようとしているのである。不足の味付けは煮汁を煮詰め、盛りつけたときにかけるようにしている。

こんなところでも、泡はおいしさに関わっているのである。

(和洋女子大学特任教授)
(お茶の水女子大学名誉教授)

フランスパンはおいしい

ひらの あさか

日本で最初のフランスパン

明治の始め、キリスト教の解禁後、初のローマ法王の使者として、東京市小石川区の関口町にあったカトリック教会に赴いたペトロ・レイ神父。

神父は孤児院の子どもたちに何か文化的な職業を身につけさせようと思案した結果、フランスパンの製造を思いつき、子どもたちの中から長尾鉀二(後の関口フランスパン職工長)を選び、彼をフランス領インドシナに修行に出し、本格的なフランスパンの製法を学ばせました。

彼が修行を終え、日本に帰った明治21年(1888年)4月、教会の敷地内の小石川関口教会(現関口教会)に製パン部を創業。これが日本における初めての本格派フランスパンの製造と販売となりました。

その後、大正3年(1914年)第一次世界大戦が始まり、孤児院に対する援助金が途絶え、パンの製造もままならなくなったため、当時教会の信者であった高世啓三(初代社長)が、一切を引き継いで関口町に新工場を建設し、関口フランスパンとして創業しました。

ブルスケッタ3種

パーティのおつまみや前菜として親しまれている「ブルスケッタ」は、イタリア中部

の郷土料理。その名は、ローマ地方の方言で「炭火であぶる」を意味するブルスカレー(bruscare)が語源となっています。基本的なつくり方は、バゲット(フランスパン)をお好みの厚さに切り、焼いてからにんにくをこすりつけ香りをつけて、トマトやチーズなど好みの具をのせていただきます。

「かじきとトマトのブルスケッタ」かじきまぐろ、トマト、ピクルスは賽の目に切る。にんにくはみじん切りにする。鍋にオリーブオイルを低温で熱し、にんにくに火を通し、続いてかじき、トマト、ピクルスの順に火を通し、白ワイン、しょうゆ少々をふって味を調える。焼いたバゲットににんにくをすりこみ、かじきトマトを上のにせる。ピクルスの甘さと酸味がトマトとマッチしておいしい。

「パプリカとツナのタルタルサラダのブルスケッタ」パプリカ、玉ねぎ、らっきょう甘酢漬けはみじん切り、これをツナと合わせてレモンを絞り、マヨネーズ、粒マスタード、こしょうとしょうゆ少々を加える。これを薄めに切って焼いたバゲットににんにくをすりこみ、タルタルサラダを上のにせる。

「アボカドとえびのブルスケッタ」アボカドは種を外し皮をむいて賽の目に切り、レモンを絞りからませる。ゆでえびはざくっと切る。玉ねぎはみじん切りに。材料を合わせてアボカドをつぶして、クリームチーズをた

してさらに合わせて、塩とこしょう、あればアンチョビペーストで味を調べ、焼いたバゲットににんにくをすりこみ、具材を上のにせる。

バゲットを使ったサラダ

「いろいろ野菜のバゲットサラダ」バゲットは、食べやすい大きさに切り揃えて焼く。ベビーリーフ、グリーンカールなどお好みの青野菜とトマト、ゆでたいんげん、バゲットと合わせてシーザードレッシングに好みにパルミジャーノチーズをすって入れ、まんべんなくかき混ぜていただく。

「きのこベーコン、ガーリックトーストサラダ」まずは、ガーリックトーストをつくる。バゲットは食べやすい大きさに切ってオープンまたは、オープントースターで軽く焼き、すりおろしたにんにくとオリーブオイルを合わせたものをバゲットに塗って再度焼く。ベーコンは細切り、しいたけ、エリンギ、しめじは食べやすい大きさに揃えておく。にんにくはみじん切りにして、フライパンにオリーブオイルをひいて高温にならないように注意してにんにくを入れ、香りが出てきたら、ベーコンときのご類を入れて火を通して、アンチョビペースト、しょうゆ、バルサミコ酢で味を調べて、ガーリックトーストとからませる。器にリーフレタスを敷いたところに具材を合わせて好みにミニトマトを半分に切ったものを合わせ、好みのドレッシングを加え、かき混ぜながらいただく。

フレンチトーストの真実

フレンチトーストは、フランス語で「パンペルデュ(Pain perdu)」 「パンの形を失った

もの」を意味するようです。

残ったパンを使うので見た目には、美しくないのかもしれませんが、あまりに身も蓋もないネーミングです。

「パンペルデュ」乾いたバゲットは、牛乳と卵と砂糖を使った液にたっぷり浸してバターで焼くことによって、素朴で手軽なふわふわおやつに美味しく変身します。

「ちょっぴりオトナのフレンチトースト」バゲットは少し厚めに切る。卵は溶いて、牛乳、砂糖、バニラエッセンス少々、ラム酒と合わせてバゲットをたっぷり浸して冷蔵庫でねかせる。フライパンに無塩バターを溶かして浸したバゲットの両面をきつね色に焼く。お皿に移して、好みに生クリームを泡立てて添え、バゲットには粉砂糖をふり、メイプルシロップをかけて、ラズベリーなどを添える。

「コーヒーミルク味のフレンチトースト」レギュラーコーヒーで入れたコーヒーに生クリーム、好みの甘さのグラニュー糖を入れたコーヒーミルクに溶き卵を合わせ、好みの厚さに切ったバゲットを浸す。フライパンに無塩バターを入れて弱い火で溶かし、バゲットを入れ中火にして両面を焼く。ココアパウダーと粉砂糖をふり、好みにバナナなどを添える。

「ちょっと和風なフレンチトースト」卵は溶いて、砂糖とバニラエッセンス、隠し味にしょうゆを加えて、薄く切ったバゲットをこれに浸してから両面を焼く。器に移して上に黒蜜をかける。 (食文家)

参考文献

関口フランスパン「関口フランスパンの歴史」

業界ニュース

★阿部 修氏 瑞宝中授章を受章

前(助)製粉振興会顧問 阿部 修氏は、秋の叙勲において、瑞宝中授章の栄に浴されました。

同氏は、食糧庁次長、(助)製粉振興会理事長等の要職を歴任され、多年にわたり農林水産行政

並びに業界の発展のために寄与された功績が認められたものです。

伝達式は11月11日、農林水産省において行われました。 【東京・大山】

★アメリカ小麦作柄報告会開催される

11月7日(金)にKKRホテル東京において、アメリカ小麦連合会主催の「2011年アメリカ小麦の作柄報告会」が開催され、製粉企業、穀物商社等の関係者多数が出席しました。

アメリカ小麦連合会からは、西海岸事務所ステイブ・ワーシング所長をはじめ3名が来日、次のような説明がありました。

- ・2011/12年の世界の小麦の生産量は681百万トンで史上3番目の規模で、貿易量も拡大するが期末在庫も上昇する見込。
- ・一方、アメリカにおいては、作付面積は、2010年より2%増加したが収穫量は前年の60.1百万トンから54.7百万トンに減少。貿易量も黒海沿岸諸国との競合もあり減少するが、期

末在庫は30%水準を維持し、引続き主要な供給国としてしての地位を維持。

- ・銘柄別の生産見込は、北部の春の低温と水分過多、生育期のヒートダメージで、HRSは前年比4.5百万トン減の11百万トン、南部は干ばつによって、HRWは前年比6.5百万トン減の21.2百万トン、SWは完璧な気象条件の下で、前年比6百万トン増の12.5百万トンが見込まれる。
- ・品質的には、HRSが夾雑物が多く細粒が多いこと、DONの発生が見られるが、水分値が下がりまた蛋白は高い。DONは中西部は無視しても良い数値で懸念材料にはならないだろう。

〈東京・満留〉

業界ニュース

★第50回農林水産祭「実りのフェスティバル」に出展

第50回農林水産祭「実りのフェスティバル」(農林水産省及び(財)日本農林漁業振興会共催)が11月4日(金)・5日(土)の2日間、東京国際展示場(東京ビッグサイト)西3ホールにおいて開催されました。

会場には、天皇杯受賞者の写真・業績紹介した天皇杯コーナーをはじめ、今年は「食べて応援しよう!」をキャッチフレーズに東日本大震災復興支援コーナーが設けられ、震災時の写真パネル展示、農林水産物の即売が行われました。また、その他の都道府県のブースでも、地域特産の農林水産物の展示・即売等が行われ大勢の

来場者で賑わっていました。(主催者側発表 約4万6,000人(2日間))

当振興会は、小麦粉の出来るまでの電光パネルの展示や小麦粉・小麦粉製品の展示、各種パンフレットやコナちゃんシール・バッチ等の配布による小麦粉知識の普及と小麦粉製品を詰め合わせた「福袋」の販売を行いました。毎年来ているという主婦等が販売時間前から並び好評のうちに終了しました。

その他、麦関係団体として、(社)全国ビスケット協会、(社)日本即席食品工業協会、全国小麦粉分離加工協会が出展し、パソコンによるクイズや製品、パンフレットの配布を行い賑わいをみせていました。 【東京・熊田】




★「小麦粉利用ハンドブック」を発行

この度、(財)製粉振興会参与の長尾精一氏は、永年培ってこられた知識、技術に最新の知見のもとに「小麦粉利用ハンドブック」を発行されました。内容は、<第I部小麦粉>小麦粉利用の

歴史、原料小麦の選択と配合、小麦・小麦粉成分の化学、小麦粉の品質評価等 <第II部小麦粉加工品>パン、めん、菓子、プレミックスなど原料から製品までを網羅した利用ハンドブックとなっています。



 **世界** (1) 2011/12年度の小麦は生産が6億8,400万トン、消費が6億7,700万トンで、期末在庫は微増の2億200万トン。

国際穀物理事会(IGC)の2011/12年度小麦需給予測を[表1]に示した。生産は前年度比3,300万トン増の6億8,400万トン、消費は2,200万トン増の6億7,700万トンで、期末在庫は700万トン増の2億200万トンの見込み。主要輸出国の期末在庫も増える。

(IGC-GMR・416/11)

(2) 2011/12年度小麦貿易量は前年度比590万トン増の1億3,240万トンに。

[表2]はIGCが予測した国別小麦貿易量で、2011/12年度の総貿易量は前年度比590万トン増の1億3,240万トンである。前年度、近東アジアとサハラ以南アフリカで輸入を減らした国が多かったが、その多くが前々年度並みに戻る。イランはほとんど輸入しない。アメリカの輸出は前年度より少ない2,700万トンだが、カナダは前年度を少し上回る1,680万トンで、オーストラリアも前年度並みの1,850万トンを輸出する。EUの輸出は大幅に減る。ウクライナは900万トン、ロシアは2,000万トン、カザフスタンは800万トン輸出する。中国は150万トン輸入し、40万トン輸出する。インドも久しぶりに200万トン輸出する。



アメリカ (1) 2011-12年度の小麦は生産量が前年比542万トン減の5,465万トンだが、輸出も減

るので期末在庫は多め。

10月12日現在の2011-12年度小麦需給を[表3]に示した。作付面積は前年度を上回ったが、作柄があまり良くなく、収穫面積、単収共に前年度を下回る。生産量は前年度比542万トン減の5,465万トンの見込みで、国内消費が少し増えるが、輸出が減少するので、期末在庫は前年度を下回るものの多めである。銘柄別の生産量、国内消費量、輸出量、及び期末繰越在庫量を[表4]、[表5]、[表6]、及び[表7]に示した。生産量は、主力銘柄のハード・ウインターとハード・スプリング小麦がそれぞれ前年度比648万トンと449万トン減の2,123万トンと1,102万トンである。前年少なかったソフト・レッド小麦は592万トン増の1,247万トンで、平年並みに回復する。ホワイト小麦は増加し、そのほとんどはソフト小麦である。デュラム小麦は半減の142万トンで少ない。国内消費は回復傾向だが、ハード・スプリングとデュラム小麦は減少する。輸出は、ハード・ウインターとデュラム小麦が大きく減少するが、ホワイト小麦は高レベルを維持する。期末在庫はハード・ウインター、ハード・スプリング、及びデュラム小麦が減少する。

(World-Grain.com・October 12/11)

(2) 創業125年で発展を続けるメンネル製粉は5代目への継承準備中。

Mennel製粉(オハイオ州Fostoriaに本社)は、小麦粉日産能力が1,846トンの全米第7位の製粉会社である。本社工場が816トン(ソフト小麦499トン、ハード小麦317トン)、バージニア州

Roanoke工場が424トン(ソフトとハード)、ミシガン州Dowagiac工場が249トン(ソフトのみ)、オハイオ州Bucyrus工場が227トン(同)、及びイリノイ州Mount Olive工場が100トン(同)である。穀物取引と輸送ビジネスも手広く行う。1886年に銀行家とハンガリーの製粉一家が創業し、メンネル家1代目が工場長として雇われた。彼は1896年に社長になったが、翌年、工場が焼失し、再建を余儀なくされた。1917年に1代目と2代目は会社を買い取り、メンネル製粉と命名した。オハイオ州Toledoにあった本社を3代目が社長になった1958年に工場所在地のFostoriaに移した。ソフト小麦製粉への特化を決断し、1996年にハード小麦も挽くようになるまで続けた。現在も、75%はソフト小麦である。3代目が2つの製粉会社を取得した。1983年から社長の4代目のDonald L.Mennel氏は、息子への継承の準備を進めている。4代目になって、ソフト小麦にボミトキシシ問題が起こって健全な原料確保が難しくなり、他作物への作付転換による小麦面積の減少が原料確保難に追い打ちをかけた。環境関連規制の強化と小麦価格の変動が経営を圧迫しているが、再投資を惜しまず、研究開発用の能力2,700キログラムのパイロットミルを作った。

(MBN・90-14/11)

(3) クッキーは回復基調。

シカゴの市場調査会社のSymphonyIRIグループによる2011年8月7日までの52週間のクッキー上位ブランドの売上高と販売個数は[表8]のようである。業界全体では売上高が1.8%、販売個数が2.1%伸びた。1年前は、プライベートラベルが牽引役で売上げに回復の兆しが見られたが、最近1年のプライベートレベルの売上高は0.16%増えただけで、販売個数は1.6%減少した。

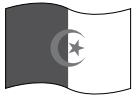
業界トップのKraft Foods社のNabisco部門の売上高は4%、販売個数は7%伸びた。Oreoブランドが大きく伸び、同社のChips Ahoy!を売上高で僅か上回ってトップブランドになった。8月中旬に新製品のTriple Double Oreoを発売した。業界2位のKellogg社のKeebler部門も好調で、売上高で2%、販売量で3%伸びたが、同社のトップブランドのKeebler Chips Deluxeだけは売上高で13%、販売量で15%低下した。新製品のKeebler Masterブランドが好調に伸びている。3位のPeperidge Farm社は売上高で1%伸びた。

(MBN・90-14/11)

(4) 9月の全粒粉パン価格は大幅に上昇し、過去最高に。家庭用小麦粉も高値。白パンの消費者物価指数は0.6下落。

合衆国労働省によると、2011年9月の型焼き白パン平均小売価格は1ポンド(約454グラム)当たり147.7セントで、前月比0.3セント、前年同月比も9.1セント高である。小麦全粒粉パンは207.3セントで、前月比9.9セント、前年同月比も29.9セント高である。家庭用小麦粉は1ポンド当たり55セントで、前月比1.3セント、前年同月比も6.7セント高であり、パスタは1ポンド当たり127セントで、前月比0.9セント安だが、前年同月比は12.2セント高である。合衆国労働省発表の9月の消費者物価指数(1982~84年平均を100とした)を[表9]に示した。穀物及びベーカリー製品全体の指数は264.1で、前月比0.4、前年同月比5.3の上昇である。白パン以外のパンは前月比で1.6、前年同月比で10.4上昇したが、白パンは前月比0.6の下落、冷凍及び冷蔵ベーカリー製品も前月比1.7の下落である。家庭で消費する全食品の指数は229.7で、前月比0.6、前年同月比5.9の上昇である。

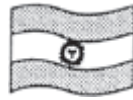
(World-Grain.com・October 20/11)



アルジェリア デュラム小麦のパンを多く食べる。製粉産業は政府の管理下に。

国土面積はアフリカ最大だが、4/5は砂漠なので穀物の輸入依存度が高く、年に500～600万トンの小麦(うちデュラム小麦が110～120万トン)を輸入する。2011年の小麦生産量は300万トン(うち250万トンがデュラム小麦)と見込まれる。小麦消費量は約840万トン(うちデュラム小麦が約340万トン)で、人口3,400万で割ると1人当たり平均で年に約245キログラムを消費する。伝統的なパンにはパン小麦よりデュラム小麦の方が好まれる。穀物売買は政府のOffice Algerien Interprofessionnel des Cereales (OAIC)が一手に行う。OAICが定めた小麦価格を下回る場合のみ民間業者が直接輸入でき、それ以外はOAICが定めた価格でOAICから買わなければならない。バゲットの価格を同レベルに保つため、補助金で売却価格を決めるので、国内需要対応分の小麦しか売ってもらえない。製粉産業は民営化されており、約330の製粉工場がある。1日の能力1,000トン以上が10工場ある。製粉工場数は増えており、製粉能力は需要量の2倍に近く、フル稼働の工場はほとんどない。主要製粉会社は30～35で、最大手のSIM社は10地区に工場を持つ。OAICは2011年1月から製粉工場に供給する小麦中のパン小麦の割当量を50%から60%に引き上げた。売渡価格はパン小麦がトン当たり12,850アルジェリア・ディナール(177米ドル)だが、デュラム小麦は22,800アルジェリア・ディナール(314.1米ドル)と高い。パン用小麦粉とパンの価格には上限が定められている。輸入パン小麦の97%はフランスからで、デュラム小麦はカナダからが多く、フランス、アメリカからも買う。

(WG・29-9/11)



アルゼンチン メキシコのBimboグループが最大の製パン会社を取得。

Grupo Bimbo社(メキシコ)は9月19日に最大の製パン会社のAlimentos Fargo社を取得したと発表した。Fargo社には製パン工場が5つあり、従業員は1,500人で、年間売上高は約1.5億米ドルである。

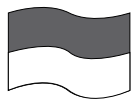
(MBN・90-16/11)



イギリス 遺伝子組換え小麦の研究用作付けを許可。

環境・食品・地方問題省は9月16日付けで、Rothamsted Research社が2012年と2013年に遺伝子組換え小麦の研究用作付けを行うことを許可した。アブラムシ耐性の小麦の作出が目的である。

(IGC-GMR・415/11)



インドネシア 豊田通商が合併で製粉事業に参入。

豊田通商はマレーシアの大手食品加工グループのMalayan Flour Mills Berhad社及びインドネシアの食品加工グループのFKS Capital社と合併で、ジャカルタに製粉会社を設立する。投資総額は約6,600万米ドルで、小麦粉日産能力が1,500トンの製粉工場を建設し、2013年には操業開始予定である。経済成長と人口増で小麦粉需要が拡大しており、中間所得層の増加と都市化の進展で消費者ニーズが多様化していると見ている。製粉からスタートし、加工分野への進出も視野に入れている。

(World-Grain.com・October 10/11)



エジプト (1) パンへの補助金を増額。

小麦価格高騰に対応するため、パンへの補助金を小麦粉1袋当たり60エジプトポンドから70(11.8米ドル)～76エジプトポンドに引き上げる。年間歳出の約24%が補助金の形で使われており、個々の補助金を見直すための委員会が作られた。

(World-Grain.com・September 19/11)

(2) 輸入小麦の蛋白規準を引き上げ。

一次産品供給公社(GASC)は世界の高品質小麦の供給量は十分だとして、輸入小麦の蛋白規準の引き上げを定着させる。ロシアからの小麦は以前の11%から12%に引き上げられており、フランス、オーストラリア及びアメリカからの小麦についても、11%から11.5%に引き上げる。ウクライナは豊作にもかかわらず、蛋白規準を満たせないのか、輸出に遅れが出ている。

(World-Grain.com・October 5/11)



オーストラリア (1) 西オーストラリア州が中国と相互貿易・投資協定を締結。

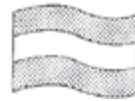
9月19日に、西オーストラリア州政府は中国の最高経済計画法人との間で貿易と投資の促進のための相互協定を締結した。資源、エネルギー、農業、食品及びインフラを含む幅広い協定で、中国の会社が西オーストラリア州の農家と穀物や農産物購入の長期契約を結びやすくなると見られている。

(World-Grain.com・September 19/11)

(2) 2011/12年産の小麦は概ね豊作で、生産量は前年度並み。プライム・ハード小麦は蛋白が低め。

州別の予測生産量を[表10]に示した。広範囲で降雨があったので、全生産量は前年度並みの2,620万トンで、ウエスタン・オーストラリア州も最近では最高の900万トンと予測されている。クインズランド州南部とニューサウス・ウェールズ州北部のプライム・ハード小麦地帯では、雨で収穫が遅れ、蛋白が低下している。

(IGC-GMR・416/11)



オーストリア 2011年産小麦は蛋白が低めだが、全般に良好な品質。

2011年産普通小麦の作付面積は28.9万ヘクタール(前年比+1.4%)、単収は5.9トン/ヘクタール(同+16.8%)で、生産量は170.51万トン(同+18.5%)である。デュラム小麦は前年とほぼ同量の76,350トンである。普通小麦の平均品質は容積重が82.6キログラム/ヘクトリットル、乾物量ベースの蛋白が13.4%、沈降値が54ミリリットル、フォーリングナンバーが319秒、グルテンが30.8%、パン体積が粉100グラム当たり670ミリリットルである。蛋白、グルテン、及び沈降値が前年より少し低いが、全般的には良好である。

(MM・148-19/11)



カナダ メープルリーフフーズ社のオンタリオ製パン工場が操業開始。

Maple Leaf Foods社はカナダ最大の製パン工場をオンタリオ州Hamiltonに建設中だったが、完成し、9月28日に操業を開始した。38.5万平方フィートの建物では、カナダ小麦100%の粉を使い、白及び小麦全粒粉パン、バンズ、イングリッシュマフィン、トルティーヤなどを製造する。

(MBN・90-16/11)



スペイン メキシコのビンボグループがサラリー社のパン事業を買い戻し。

Grupo Bimbo社はスペインとポルトガルのSara Lee社の製パン事業を約1.15億ユーロで購入する。この事業は元々ビンボグループが所有していたが、2001年にサラリー社に売却した。2011年会計年度のスペインでの売上高は4.08億米ドルだった。

(World-Grain.com・October 10/11)



中国 小麦の買上げ価格を引き上げ。

政府は9月28日に、2012年の小麦最低買上げ価格を引き上げると発表した。50キログラム当たりで、主産地の白小麦は7元引き上げて102元(16米ドル)に、赤小麦と混合小麦は9元引き上げて102元にする。食品価格が約1/3を占める消費者物価指数の前年同月比は、27か月連続で上昇し、7月は6.5%、8月は6.2%の上昇だった。2010年の穀物生産量は5.46億トンで、前年比2.9%増、7年連続の増加で、2011年は5.5億トンになると見込まれる。

(World-Grain.com・September 29/11)



ドイツ (1) 9月の小麦価格は大きな変化がないが、8月の小麦粉価格は少し下落。

[表11]は国内主要市場平均の9月の小麦、ライ麦、及びふすまの価格である。小麦と小麦ふすまは大きな変化がないが、ライ麦価格は上昇した。8月末の業務用小麦粉価格はトン当たり419.17ユーロで、2010年7月の252.50ユーロに比べてかなり高い。[表12]は8月の小麦粉とライ麦粉の製粉工場出荷価格指数である。小麦粉は原料価格の安定化を反映して7月の指数より2.0

下落したが、前年同月比は32.7の上昇である。[表13]は家庭用小麦粉(タイプ405)の消費者価格で、銘柄品ではない粉はかなり安くて変化がないが、銘柄品は高くて月による変動がある。

(MM・148-19/11)

(2) 2011年産小麦の製粉工場出回り品は低灰分だが、蛋白が低めでパン体積も小さめ。

2011年産小麦で製粉工場出回り品の平均品質を[表14]に示した。灰分が低く、粉歩留りも高いが、蛋白とグルテンが低めで、パンの吸水は高いが体積が小さめ。

(MM・148-19/11)

(3) 2010年のパン用穀物挽砕量は802万トンで、前年比4.5%増。

[表15]は2010年のデュラム小麦を除くパン用穀物挽砕量である。合計挽砕量は802万トンで、前年比4.5%増だった。そのうち普通小麦は718万トンで5.7%増、ライ麦は84万トンで4.5%減である。国内向け普通小麦は654万トンで4.6%増、輸出向け普通小麦は64万トンで17.3%増である。ライ麦は国内向けが4.8%減だが、輸出向けが12.6%増加した。小麦粉生産量は572万トンで、粉歩留りは79.6%で前年より少し低い。普通小麦挽砕量は1991年から2006年まで大幅な増加傾向だったが、2007年以降は横ばいで、国内向け普通小麦挽砕量もほぼ同傾向である。輸出向けは2001年までに比べて減少傾向にある。

(MM・148-19/11)



ロシア 穀物増産計画を発表。

農務省は8月28日に2013~2020年の農業開発投資計画を発表した。6.8兆ルーブル(2,260億米ドル)の予算で穀物生産量を2020年までに1.25億トンに引き上

げ、4,150万トンの輸出を可能にする。

(IGC-GMR・415/11)

[表1] 世界の小麦需給

(百万トン)

	08/09	09/10	10/11(推定)	11/12(予測)
期初在庫	132	172	199	195
生産	685	679	651	684
供給計	817	850	850	879
消費計	645	652	655	677
うち飼料用	113	114	113	124
工業用	18	19	19	20
食用	447	452	458	463
期末在庫	172	199	195	202
前年度比	+40	+27	-4	+7
主要輸出国*	69	77	71	74
貿易	137	128	127	132

(2011年10月27日現在) *はアルゼンチン、オーストラリア、カナダ、EU、カザフスタン、ロシア、ウクライナ、アメリカ (IGC)

[表2] 世界の小麦貿易量

(百万トン)

輸入国		08/09	09/10	10/11(推定)	11/12(予測)
ヨーロッパ	アルバニア	0.2	0.3	0.3	0.3
	EU-27	7.9	5.1	4.7	7.5
	ノルウェー	0.3	0.4	0.3	0.3
	スイス	0.4	0.4	0.4	0.4
	その他	0.4	0.3	0.3	0.4
	計	9.2	6.5	6.0	8.8
CIS	アゼルバイジャン	1.6	1.0	1.3	1.4
	ベラルーシ	0.1	T	T	0.1
	グルジア	0.5	0.7	0.6	0.8
	ロシア	0.1	0.1	T	0.1
	ウクライナ	0.1	T	T	0.1
	ウズベキスタン	1.5	1.7	1.6	1.7
	その他	2.5	1.9	1.8	1.9
	計	6.4	5.5	5.4	6.0
北・中 アメリカ	キューバ	0.8	0.7	0.8	0.8
	メキシコ	3.3	3.1	3.4	3.6
	アメリカ	3.0	2.2	2.2	2.8
	その他	2.8	2.9	2.9	3.0
		計	10.0	8.8	9.3

輸入国		08/09	09/10	10/11(推定)	11/12(予測)	
南アメリカ	ボリビア	0.4	0.4	0.3	0.3	
	ブラジル	6.3	6.7	6.6	6.5	
	チリー	0.9	0.7	0.6	0.8	
	コロンビア	1.5	1.4	1.4	1.4	
	エクワドル	0.5	0.5	0.6	0.5	
	ペルー	1.4	1.6	1.8	1.7	
	ベネズエラ	1.4	1.5	1.4	1.5	
	その他	0.2	0.1	0.1	0.2	
	計	12.6	13.1	12.8	12.9	
近東アジア	イラン	8.9	3.0	0.2	0.1	
	イラク	3.9	3.9	3.4	3.6	
	イスラエル	2.0	1.8	1.4	1.9	
	ヨルダン	0.9	0.9	1.0	1.0	
	レバノン	0.5	0.5	0.4	0.5	
	サウジアラビア	1.3	1.8	1.8	2.0	
	シリア	1.5	1.8	0.5	1.3	
	トルコ	3.6	3.3	3.6	3.5	
	UAE	1.4	1.4	0.9	1.2	
	イエメン	2.8	2.7	2.6	2.7	
	その他	0.7	0.7	0.9	0.8	
	計	27.5	21.8	16.6	18.4	
極東アジア	太平洋アジア	中国	0.5	1.4	1.0	1.5
		インドネシア	5.5	5.4	6.6	6.5
		日本	4.9	5.5	6.0	5.7
		北朝鮮	0.1	0.1	0.2	0.2
		韓国	3.3	4.4	4.9	4.9
		マレーシア	1.1	1.1	1.4	1.3
		フィリピン	3.2	3.0	3.2	3.3
		シンガポール	0.3	0.3	0.3	0.3
		台湾	1.1	1.2	1.4	1.3
		タイ	1.1	1.5	1.9	1.8
		ベトナム	1.0	1.9	2.6	2.4
		その他	0.8	0.9	0.8	0.9
		計	22.9	26.9	30.4	30.0
	南アジア	バングラデシュ	2.7	3.5	3.4	3.5
		インド	T	0.3	0.2	0.1
		パキスタン	3.0	0.2	0.1	0.2
		スリランカ	1.0	1.2	1.1	1.1
		その他	2.3	2.2	1.9	1.9
	計	9.0	7.3	6.7	6.8	

輸入国		08/09	09/10	10/11(推定)	11/12(予測)	
	計	31.8	34.2	37.0	36.8	
ア フ リ カ	北 ア フ リ カ	アルジェリア	6.3	5.1	6.4	5.9
		エジプト	9.8	10.2	10.4	10.3
		リビア	2.1	2.1	1.4	1.5
		モロッコ	3.7	2.3	3.9	3.0
		チュニジア	1.8	1.5	1.8	1.8
		計	23.8	21.3	23.9	22.5
	サ ハ ラ 以 南	コートジボワール	0.4	0.6	0.5	0.5
		エチオピア	1.0	0.9	0.3	0.8
		ケニア	0.7	1.3	0.7	1.2
		ナイジェリア	3.6	4.0	4.1	4.1
南アフリカ		1.5	1.6	1.7	1.4	
スーダン		1.7	1.8	1.6	1.8	
その他		5.9	6.2	5.6	6.4	
	計	14.7	16.4	14.4	16.2	
	計	38.5	37.7	38.3	38.7	
オ セ ア ニ ア	ニュージーランド	0.3	0.3	0.4	0.4	
	その他	0.3	0.4	0.5	0.5	
	計	0.6	0.7	0.9	0.9	
世 界 計		136.8	127.7	126.5	132.4	

注：年度は7月～6月、Tは5万トン以下
(2011年10月27日現在)

(百万トン)

輸出国	08/09	09/10	10/11(推定)	11/12(予測)
アルゼンチン	8.5	5.1	7.6	7.8
オーストラリア	13.5	13.7	18.5	18.5
カナダ	18.3	18.2	16.4	16.8
EU-27	24.5	20.8	22.2	15.3
カザフスタン	5.8	8.0	5.6	8.0
ロシア	18.3	18.8	4.0	20.0
ウクライナ	12.9	9.3	4.3	9.0
アメリカ	27.3	23.9	35.7	27.0
中国	0.2	0.4	0.4	0.4
インド	T	—	—	2.0
パキスタン	1.4	0.3	1.0	0.5
メキシコ	1.2	0.9	0.8	0.7
シリア	T	T	T	T
トルコ	2.2	4.0	2.4	3.4
その他	2.6	4.1	7.5	3.2
世界計	136.8	127.7	126.5	132.4

注：年度は7月～6月、Tは5万トン以下
(2011年10月27日現在)

(IGC)

[表3] アメリカの小麦需給

(千トン)

項 目		2011-12	2010-11	2009-10	2008-09	
作付面積(百万ヘクタール)		22.02	21.69	23.96	25.58	
収穫面積(百万ヘクタール)		18.49	19.26	20.19	22.54	
単収(トン/ヘクタール)		2.95	3.11	2.99	3.02	
供 給	期初在庫	23,460	26,562	17,881	8,328	
	生産	54,649	60,065	60,364	68,012	
	輸入	3,266	2,640	3,239	3,456	
	計	81,374	89,240	81,456	79,796	
需 要	国内消費	食用	25,583	25,202	25,011	25,229
		種子用	2,123	1,932	1,878	2,123
		飼料用	4,354	3,592	4,082	6,940
		計	32,060	30,699	30,971	34,292
	輸出		26,535	35,081	23,922	27,624
	計		58,595	65,780	54,921	61,915
期末在庫		22,779	23,460	26,562	17,881	
平均農家価格(ドル/ブッシェル)		7.10~7.90	5.70	4.87	6.78	

(2011年10月12日現在)

(USDA)

[表4] アメリカの小麦銘柄別生産量

(千トン)

銘柄	2011	2010	2009	2008
ハード・ウインター	21,228	27,705	25,038	28,168
ソフト・レッド	12,465	6,550	10,995	16,710
ハード・スプリング	11,022	15,513	14,914	13,934
ホワイト	8,518	7,484	6,450	6,940
デュラム	1,415	2,885	2,966	2,286
計	54,649	60,065	60,364	68,012

(2011年10月12日現在)

(USDA)

[表5] アメリカの小麦銘柄別国内消費量

(千トン)

銘柄	2011-12	2010-11	2009-08	2008-09
ハード・ウインター	11,948	10,968	11,458	12,846
ソフト・レッド	7,756	6,205	6,967	9,036
ハード・スプリング	6,913	8,382	7,675	7,430
ホワイト	3,157	2,585	2,368	2,722
デュラム	2,313	2,585	2,449	2,204
計	32,060	30,699	30,944	34,292

(2011年10月12日現在)

(USDA)

[表6] アメリカの小麦銘柄別輸出量

(千トン)

銘柄	2011-12	2010-11	2009-10	2008-09
ハード・ウインター	11,703	16,765	10,070	12,165
ソフト・レッド	3,402	2,966	2,966	5,416
ハード・スプリング	5,987	9,226	5,824	5,715
ホワイト	4,899	4,953	3,892	3,701
デュラム	544	1,170	1,197	653
計	26,535	35,081	23,977	27,624

(2011年10月12日現在)

(USDA)

[表7] アメリカの小麦銘柄別期末繰越在庫量

(千トン)

銘柄	2011	2010	2009	2008
ハード・ウインター	8,110	10,505	10,478	6,913
ソフト・レッド	6,641	4,654	6,586	4,654
ハード・スプリング	4,273	5,035	6,368	3,865
ホワイト	3,021	2,313	2,177	1,742
デュラム	762	953	953	680
計	22,779	23,460	26,562	17,881

(換算の関係か、2011-11年度の銘柄ごとの合計と計は若干差がある)
(2011年10月12日現在)

(USDA)

[表8] アメリカのクッキー上位5ブランド

順位	ブランド	売上高		販売個数	
		ドル	前年比(%)	個数	前年比(%)
1	Nabisco Oreo	347,266,200	8.4	130,885,100	11.1
2	Nabisco Chips Ahoy!	343,244,900	2.8	135,021,000	9.8
3	Nabisco Oreo Double Stuf	153,938,600	-9.6	51,246,760	-7.8
4	Little Debbie	138,785,000	-0.5	124,990,200	3.8
5	Lofthouse	138,191,000	3.2	41,743,200	11.2
	プライベート・ラベル	669,339,100	0.2	307,152,600	-1.6
	クッキー合計	4,695,054,000	1.8	2,200,020,000	2.1

(Wal-Martを除く、スーパーマーケット、ドラッグストア、および大量販売店で調査した
2011年8月7日までの52週間のデータ)

(SymphonyIRI group)

[表9] アメリカの消費者物価指数

(1982~84の平均を100として)

	2011年9月	前月比	前年同月比
家庭で消費する全食品	229.7	0.6	5.9
全穀物及びベーカリー製品	264.1	0.4	5.3
シリアル、穀物製品	230.8	0.6	6.2
粉、プレミックス	248.3	0.9	9.9
朝食用シリアル	227.3	0.5	5.8
米、パスタ、コーンミール	235.9	0.6	5.4
ベーカリー製品	281.8	0.4	4.9
パン*	170.9	0.2	6.8
白パン	308.1	-0.6	4.6
白パン以外のパン	336.1	1.6	10.4
フレッシュビスケット、ロール、マフィン*	166.9	1.6	8.0
ケーキ、カップケーキ及びクッキー	258.8	1.0	3.5
クッキー	246.6	1.9	1.5
フレッシュケーキ、カップケーキ	270.4	0.2	5.1
その他のベーカリー製品	256.9	-0.6	2.8
フレッシュスイートルール、コーヒーケーキ及びドーナツ	268.0	-0.7	4.4
クラッカーとクラッカー製品	297.4	-0.1	2.6
冷凍及び冷蔵ベーカリー製品	265.7	-1.7	4.0

* 1997年12月を100とした指数

[表10] オーストラリアの州別小麦生産量

(百万トン)

	ウェスタン オーストラリア	ニューサウス ウェールズ	ビクトリア	クインズランド	サウス オーストラリア	計
2006	5.1	2.6	0.9	0.8	1.4	10.8
2007	5.8	2.5	2.0	1.0	2.3	13.6
2008	8.9	6.8	1.5	1.9	2.3	21.4
2009	8.1	5.4	3.0	1.3	4.0	21.8
2010	4.7	10.6	4.1	1.3	5.6	26.3
2011	9.0	7.7	3.3	1.6	4.6	26.2

(2011年10月27日現在)

(ABARES、IGC)

[表11] ドイツの小麦・ライ麦・ふすまの価格

品 目	2011年				2010年
	9/19～9/25		9/12～9/18		9/20～9/26
	Euro/t	市場数	Euro/t	市場数	Euro/t
Aグループ高品質小麦	209.00	8	215.94	8	237.50
パン用小麦	200.28	8	208.86	7	224.00
パン用ライ麦	229.86	7	232.21	7	215.00
飼料用小麦	193.97	7	195.00	7	176.44
小麦ふすま(バラ)	133.88	8	139.17	9	115.67

(MM)

[表12] ドイツの業務用製粉製品の製粉工場出荷価格指数

品 目	2011年8月	2010年7月	2010年8月
小麦粉	145.3	147.3	112.6
ライ麦粉	148.1	151.8	122.7

(ドイツ連邦統計局)

[表13] ドイツの家庭用小麦粉消費者価格

(Euro/kg)

品 目	2011年8月	2010年7月	2010年8月
タイプ405の格安小麦粉	0.25	0.25	0.25
タイプ405の銘柄品小麦粉	0.83	0.87	0.82

(AMI消費者価格一覧表)

[表14] 2011年ドイツ産小麦の製粉工場出回り品の品質

		2011年		2010年	過去5年の
		平均値	範囲	平均値	平均値
灰分	(乾物量%)	1.54	1.23-2.02	1.67	1.66
硬度	(NIR)	55	39-63	53	54
蛋白	(乾物量%)	13.4	10.5-18.1	13.7	13.7
沈降価	(ml)	55	19-77	51	53
ウエットグルテン	(%)	27.4	19.2-44.1	28.3	28.7
グルテン指数		78	21-99	89	77
フォーリングナンバー	(秒)	303	95-411	322	328
タイプ550の粉歩留	(%)	79.8	72.3-83.8	77.3	78.4
RTM法パン吸水	(%)	59.9	52.1-66.6	57.2	58.7
RTM法パン体積	(ml/100g)	626	450-915	679	669

(MM)

[表15] ドイツのパン用穀物挽砕量

(千トン)

		国内向け	輸出向け	計
普通小麦	2009	6,250.6	546.8	6,797.4
	2010	6,540.0	641.6	7,181.6
	前年対比%	4.6	17.3	5.7
ライ麦	2009	864.2	14.3	878.5
	2010	823.0	16.1	839.1
	前年対比%	-4.8	12.6	-4.5
パン用穀物計	2009	7,114.8	561.1	7,675.9
	2010	7,363.0	657.7	8,020.7
	前年対比%	3.5	17.2	4.5

(MM)

(単位：千トン、前年比%)

製粉工場における玄麦および小麦粉の月別需給動向(23年度)

年 月	玄			麦			小			粉		
	買入数量	対前年比	加工量	対前年比	月末在庫	対前年比	生産量	対前年比	販売量	対前年比	月末在庫	対前年比
平成17年度	6,039	98.3	6,030	98.9	461	102.2	4,623	99.1	4,615	99.0	282	102.9
平成18年度	6,271	103.8	5,982	99.2	751	162.9	4,599	99.5	4,594	99.5	287	101.8
平成19年度	5,901	94.1	6,037	100.9	616	82.0	4,684	101.8	4,677	101.8	293	102.1
平成20年度	5,748	97.4	5,848	96.9	517	83.9	4,564	97.4	4,575	97.8	282	96.3
平成21年度	5,802	101.1	5,916	101.4	405	78.2	4,612	101.1	4,620	101.0	274	97.1
平成22年度	6,559	113.0	6,041	102.1	924	228.1	4,725	102.4	4,690	101.5	308	112.6
22.4	505	116.8	543	102.0	368	87.7	428	104.1	425	103.8	277	97.6
5	534	105.4	489	100.6	413	93.9	385	101.2	372	99.5	290	99.9
6	466	105.9	493	102.2	386	97.1	388	104.5	388	102.0	289	103.1
7	524	97.7	490	100.5	419	94.1	382	100.8	385	100.3	286	103.8
期 計	2,029	105.9	2,016	101.3	1,582	102.7	1,570	101.5	1,570	101.5		
8	514	114.1	473	101.8	460	106.7	366	100.4	362	100.0	290	104.3
9	1,278	276.8	492	101.2	1,247	306.3	382	100.9	386	99.7	286	106.1
10	235	44.7	501	96.5	980	237.4	394	97.2	382	96.4	298	106.9
11	509	99.9	517	104.7	973	226.8	404	104.0	407	104.9	296	105.7
期 計	2,536	130.2	1,983	101.0	1,547	100.6	1,547	100.6	1,537	100.2		
12	479	88.9	549	102.6	902	208.7	428	102.7	435	102.8	289	105.6
23.1	426	95.6	461	100.0	867	208.0	361	99.7	346	102.3	304	102.2
2	564	127.0	479	106.4	952	231.8	373	103.1	368	103.1	309	105.9
3	524	102.7	552	107.0	924	228.1	434	107.6	435	103.1	308	112.6
期 計	1,993	102.8	2,042	104.0	1,612	105.1	1,599	103.8	1,599	103.8		
23.4	533	105.5	564	103.9	893	242.8	441	103.1	434	102.2	315	114.0
5	470	88.0	512	104.7	855	207.3	394	102.5	390	104.9	320	110.4
6	523	112.3	526	106.8	852	220.9	407	105.1	416	107.1	311	107.6
7	573	109.4	461	94.1	964	229.9	354	92.8	350	90.8	316	110.5
期 計	2,100	103.5	2,060	102.2	1,597	101.0	1,597	101.0	1,590	101.3		
8	720	140.0	455	96.2	1,229	267.0	351	95.8	365	101.0	302	103.8
9	580	45.4	499	101.5	1,309	105.1	402	105.3	405	105.0	298	104.2
10												
11												
期 計												
12												
24.1												
2												
3												
期 計												
年度計												

(注) 1. 玄麦の買入・加工数量にはSBSでの買受分(19年度から)、大臣証明制度による輸出見返り分、納付金輸入分、民間流通麦及びその他国内産麦を含み、小麦粉の生産・販売量は、輸出分を除いた数量である。
 2. 「製粉・精麦・麦茶工場需給実績報告」(総合食料局食糧貿易課)による。
 3. 四捨五入の関係で内訳と計が一致しないことがある。
 4. 23年9月分は速報のため、選って訂正がある場合があります。

小麦加工食品の輸出の推移

(単位：トン、金額：千円)

区 分 年 月	小麦粉、小麦(ひき割、ミール、ペレット)			小麦粉調製品(ケーキ、ミックスを含む)			マカロニおよびスパゲッティ			うどんおよびそばめん		
	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額
平成15年	116	-0.4	9,272,192	1,545	5.9	441,651	410	62.0	64,642	6,582	-9.9	1,748,517
16	108	-4.5	8,332,834	1,791	16.0	558,959	328	-20.0	45,188	7,719	17.3	2,008,637
17	110	-4.8	8,048,049	2,317	29.4	744,439	1,054	221.3	110,260	7,863	1.9	2,062,502
18	116	0.0	7,895,261	2,442	5.4	797,965	1,196	13.4	126,174	10,065	28.0	2,476,428
19	118	-11.9	7,725,144	3,151	29.1	1,043,144	1,150	-3.8	140,800	12,561	24.8	2,988,513
20	104	-26.8	8,338,085	3,377	7.1	1,242,742	743	-35.4	150,112	12,517	-0.3	3,227,623
21	93.5	-0.9	5,414,482	3,113	-7.8	1,150,484	822	10.6	150,825	11,947	-4.6	3,124,772
22	88	5.9	5,860,022	3,574	14.8	1,256,700	770	-6.3	139,835	12,492	4.6	3,214,545
23年1月	83	-25.9	344,882	155	-46.5	58,706	48	-29.4	5,594	970	-3.8	229,675
2	82	23.2	587,770	188	-37.1	63,141	60	37.1	9,860	927	6.3	247,586
3	82	-11.2	501,683	175	-9.7	92,496	62	38.4	9,859	995	-5.7	265,137
4	83	-32.9	402,848	175	-55.2	57,071	36	-47.1	7,482	887	-28.4	223,849
5	82	-11.5	431,416	126	-55.0	54,851	49	-8.6	9,358	910	-5.0	234,453
6	81	21.5	595,877	211	1.5	80,312	28	-46.5	5,483	856	7.0	218,087
7	80	2.4	484,678	151	-44.8	59,824	33	-46.9	6,867	1,003	-1.8	263,818
8	78	16.769	491,110	181	-25.2	72,291	74	10.8	10,041	904	-9.3	225,113
9	19,842	15.5	555,404	189	-12.2	79,295	46	-53.7	7,380	1,059	3.0	280,634
10												
11												
12												
23年1~12月計	145,709	-1.2	4,394,968	1,587	-34.8	617,987	437	-21.9	71,894	8,511	-5.2	2,188,352

区 分 年 月	ビスケット(スイート)			その他のベーカリー製品等			インスタントラーメン		
	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額
平成15年	1,052	10.3	868,674	8,220	0.9	6,435,115	8,743	-3.4	2,967,360
16	769	-26.9	720,628	9,328	13.5	7,104,285	8,288	-5.2	2,847,158
17	719	-6.6	762,779	12,274	31.6	8,722,215	8,445	1.9	3,214,048
18	762	6.1	804,131	13,120	6.9	9,755,783	9,091	7.7	3,586,187
19	1,098	44.2	1,133,758	14,688	12.0	11,536,637	9,200	1.2	3,645,447
20	1,198	9.1	1,270,762	14,672	-0.1	12,115,107	8,120	-11.7	3,507,616
21	886	-26.1	993,506	11,972	-18.4	10,258,866	6,181	-23.9	2,919,649
22	974	10.0	1,067,436	13,343	11.5	11,770,935	5,981	-3.2	2,825,812
23年1月	83	-29.7	71,186	860	-28.7	100,076	411	-8.8	185,743
2	57	-15.9	63,905	1,030	10.6	840,462	431	-9.3	183,226
3	82	-6.7	68,876	1,025	9.7	892,087	434	-14.8	185,924
4	83	-4.9	66,292	832	-18.0	674,195	285	-53.5	102,682
5	82	-52.6	32,367	639	-41.1	569,502	376	-21.4	155,597
6	81	-16.0	45,550	1,003	-8.5	798,765	435	-14.5	192,831
7	80	-11.5	52,670	976	2.6	863,297	536	14.2	210,583
8	78	-31.2	55,355	860	-17.6	758,278	319	-30.5	143,894
9	63	-28.2	78,163	987	-15.1	930,108	432	-7.5	191,347
10									
11									
12									
23年1~12月計	486	-22.7	534,364	8,212	-12.9	6,426,770	3,660	-17.4	1,551,827

(注) ①財務省貿易統計(全国分)品別国別表>輸出(月次)による。
②その他のベーカリー製品等は、スイートビスケットおよび米菓を除く焼菓子類並びにライスバーバー等をいう。

国際価格の推移

(単位：トン当たりドル、()内はブッシェル当たりドル)

品名	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
小麦 (シカゴ・SRW小麦No.2, 期近もの)	2003	(3.13)	(3.34)	(3.00)	(2.86)	(3.22)	(3.16)	(3.15)	(3.79)	(3.56)	(3.35)	(4.06)	(3.87)
		115	123	110	105	118	116	116	116	139	131	123	149
	2004	(3.86)	(3.75)	(3.73)	(3.83)	(3.54)	(3.33)	(3.03)	(3.37)	(3.03)	(3.19)	(3.06)	(3.03)
		142	138	137	141	130	129	122	122	111	124	117	112
	2005	(2.98)	(3.00)	(3.68)	(3.09)	(3.06)	(3.23)	(3.49)	(3.49)	(3.16)	(3.23)	(3.39)	(3.07)
		109	110	135	114	113	119	128	128	116	119	125	113
	2006	(3.29)	(3.52)	(3.62)	(3.50)	(4.00)	(3.62)	(3.66)	(3.66)	(3.77)	(3.93)	(5.43)	(4.82)
		121	129	133	129	147	133	134	134	138	144	199	177
	2007	(4.64)	(4.53)	(4.61)	(4.88)	(4.97)	(6.07)	(6.02)	(6.02)	(6.97)	(8.46)	(9.53)	(7.78)
		170	167	169	179	183	223	221	221	256	311	350	282
	2008	(9.32)	(9.43)	(10.93)	(8.96)	(7.76)	(8.77)	(8.11)	(8.11)	(8.25)	(7.27)	(5.56)	(5.34)
		342	378	426	329	284	322	298	298	303	267	204	196
2009	(5.69)	(5.36)	(5.44)	(5.22)	(5.78)	(5.75)	(5.35)	(5.35)	(4.82)	(4.71)	(5.05)	(5.39)	
	209	197	200	192	212	211	196	196	177	173	186	198	
2010	(5.10)	(4.87)	(4.79)	(4.91)	(4.72)	(4.52)	(5.96)	(5.96)	(7.03)	(7.27)	(7.05)	(6.73)	
	187	179	176	180	173	166	219	219	258	267	259	247	
2011	(7.73)	(8.40)	(6.68)	(7.44)	(7.36)	(6.73)	(6.73)	(6.95)	(7.13)	(6.96)	(6.23)	(6.33)	
	284	309	245	273	271	247	247	255	262	256	229	232	
2003	(2.36)	(2.36)	(2.33)	(2.39)	(2.46)	(2.39)	(2.39)	(2.15)	(2.20)	(2.29)	(2.26)	(2.37)	
	93	93	92	94	97	94	94	85	87	90	89	93	
2004	(2.67)	(2.83)	(3.02)	(3.16)	(3.00)	(2.86)	(2.86)	(2.36)	(2.25)	(2.14)	(2.06)	(1.99)	
	105	112	119	125	118	113	113	93	89	84	81	78	
2005	(2.00)	(2.00)	(2.14)	(2.08)	(2.08)	(2.22)	(2.22)	(2.37)	(2.15)	(2.04)	(2.02)	(1.93)	
	79	79	84	82	82	87	87	93	85	80	80	76	
2006	(2.13)	(2.23)	(2.24)	(2.37)	(2.45)	(2.38)	(2.38)	(2.44)	(2.30)	(2.42)	(3.03)	(3.56)	
	84	88	88	93	97	94	94	96	91	95	119	140	
2007	(3.91)	(4.11)	(4.02)	(3.62)	(3.70)	(3.81)	(3.81)	(3.26)	(3.31)	(3.51)	(3.69)	(3.69)	
	154	162	158	142	146	150	150	128	130	138	145	145	
2008	(5.08)	(5.01)	(5.56)	(6.06)	(5.91)	(7.33)	(6.47)	(6.47)	(5.30)	(5.62)	(3.88)	(3.86)	
	200	203	215	239	236	288	255	255	209	221	153	152	
2009	(3.65)	(3.63)	(3.92)	(3.94)	(4.17)	(4.06)	(3.30)	(3.30)	(3.19)	(3.47)	(3.73)	(3.91)	
	144	143	154	155	164	160	130	130	126	136	147	154	
2010	(3.72)	(3.62)	(3.63)	(3.64)	(3.63)	(3.54)	(3.92)	(3.92)	(4.12)	(4.95)	(5.63)	(5.56)	
	146	142	143	143	143	139	154	154	162	195	222	219	
2011	(6.49)	(6.91)	(6.36)	(7.42)	(6.97)	(7.02)	(7.01)	(7.01)	(7.07)	(7.01)	(6.40)	(6.46)	
	255	272	250	292	275	276	276	276	278	276	252	254	

(注) 1. 小麦は、シカゴ相場による月央の終値である(2011年11月分は11月15日)。
2. とうもろこしはシカゴ相場による月平均価格である。

輸入食糧小麦の入札結果(港湾諸経費を除く)の概要

(単位：トン、円/ドル当たり)

入札月および積月		平成23年1月及び2月入札分 (積月：3月積み)			平成23年2月入札分 (積月：4月積み)			平成23年3月入札分 (積月：5月積み)			平成23年4月入札分 (積月：6月積み)			平成23年5月入札分 (積月：7月積み)		
産地	銘柄	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格
アメリカ	WW	57,394	29,875	31,369	75,550	30,370	31,859	71,587	29,833	31,325	79,365	30,545	32,072	82,058	30,069	31,572
	SH	53,793	33,782	35,471	74,987	36,385	38,204	47,837	34,185	35,894	88,101	35,066	36,819	75,576	35,339	37,106
	DNS	123,231	40,717	42,753	160,422	46,188	48,497	139,439	43,671	45,855	137,963	44,141	46,348	151,497	45,639	47,921
	小計	234,418	36,471	38,295	310,959	39,981	41,980	258,863	38,091	39,996	305,429	37,990	39,890	309,131	38,988	40,937
カナダ	1CW	71,286	41,875	43,969	83,023	43,415	45,586	63,695	39,742	41,729	86,348	43,400	45,570	84,310	44,907	47,152
	Durum	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	71,286	41,875	43,969	83,023	43,415	45,586	63,695	39,742	41,729	86,348	43,400	45,570	84,310	44,907	47,152
オーストラリア	ASW	61,603	35,826	37,617	70,980	38,005	39,905	77,865	36,348	38,165	92,453	39,805	41,795	82,432	40,920	42,966
	PH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	61,603	35,826	37,617	70,980	38,005	39,905	77,865	36,348	38,165	92,453	39,805	41,795	82,432	40,920	42,966
	小計	367,307	37,412	39,283	464,962	40,293	42,308	400,423	38,015	39,916	484,230	39,301	41,266	475,873	40,371	42,390

入札月および積月		平成23年6月入札分 (積月：8月積み)			平成23年7月入札分 (積月：9月積み)			平成23年8月入札分 (積月：10月積み)			平成23年9月入札分 (積月：11月積み)			平成23年10月入札分 (積月：12月積み)		
産地	銘柄	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格
アメリカ	WW	84,605	27,711	29,097	74,084	25,390	26,660	68,208	25,482	26,756	50,115	24,996	26,246	53,232	22,570	23,699
	SH	61,383	32,707	34,342	59,719	28,463	29,886	64,764	29,805	31,295	57,568	29,896	31,391	59,928	26,474	27,798
	DNS	177,206	44,000	46,200	114,453	36,336	38,153	75,336	34,690	36,425	66,944	34,717	36,453	42,672	34,658	36,391
	小計	323,194	37,591	39,471	248,256	31,176	32,735	208,308	30,156	31,664	174,627	30,338	31,855	155,832	27,381	28,750
カナダ	1CW	87,443	40,980	43,029	72,029	37,010	38,861	68,309	35,578	37,357	63,356	35,609	37,389	97,284	35,064	36,817
	Durum	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	87,443	40,980	43,029	72,029	37,010	38,861	68,309	35,578	37,357	63,356	35,609	37,389	97,284	35,064	36,817
オーストラリア	ASW	112,719	36,522	38,348	74,984	37,186	39,045	69,003	32,546	34,173	53,938	29,980	31,479	58,400	24,171	25,380
	PH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	112,719	36,522	38,348	74,984	37,186	39,045	69,003	32,546	34,173	53,938	29,980	31,479	58,400	24,171	25,380
	小計	523,356	37,927	39,823	395,269	33,379	35,048	345,620	31,705	33,290	291,921	31,416	32,987	311,516	29,179	30,638

(注) 上表の詳細は、農林水産省ホームページ「申請・お問い合わせ」[http://www.maff.go.jp/j/supply/kouhyou/keiyaku/kyokyu.html]、「調達・入札」の「調達情報・公表事項」を参照し、次に「調達・入札」の「調達情報・公表事項」を参照し、「契約に係る情報の公表」を参照し、「食料安定供給特別会計」を検索し(アドレス「http://www.maff.go.jp/j/supply/kouhyou/keiyaku/kyokyu.html」)、「米管理動定・業務動定」を参照し、「米管理動定・業務動定」の「一般競争入札・指名競争入札(物品役務等)」を検索して輸入小麦に該当する箇所をご覧ください。
(資料：農林水産省総合食料局食糧貿易課)

■資料 ★★

2 平成23年産小麦の秋まき、春まき別作付面積(北海道・子実用)

区 分	作付面積	前年産との比較	
		対 差	対 比
	ha	ha	%
小 麦	119,200	2,900	102
秋まき小麦	110,100	3,300	103
春まき小麦	9,120	△380	96

[累年データ]

小麦の作付面積(子実用)の推移

(単位：ha)

区 分	小 麦		
	全国	北海道	都府県
平成14年産	206,900	112,800	94,000
15	212,200	112,700	99,500
16	212,600	114,000	98,600
17	213,500	115,500	98,000
18	218,300	120,500	97,700
19	209,700	117,100	92,600
20	208,800	115,700	93,100
21	208,300	116,300	92,000
22	206,900	116,300	90,600
23(概数)	211,500	119,200	92,300

—「ソフト & ハード」(読者の欄)への投稿のお願い—

読者の皆様、当振興会の広報誌「製粉振興」の内容を、より親しみのもてるものにするために、次のような内容の投稿をお待ちしていますので、記事をお寄せ下さい。

また、この広報誌の内容の充実を図っていきたくと考えていますので、ご意見等がございましたらお寄せ下さい。

- ・テーマは、小麦や小麦粉製品についての随想、紹介等と考えていますが、小麦と関係のない趣味などの話でも結構です
- ・投稿者名は実名でも筆名でも結構です
- ・長さは1,200字程度(1頁)とします
- ・掲載分には薄謝を進呈します



「コナちゃん」

(マスコットの小麦粉の精)

★ 編集後記

- 全国約3,000万人の高齢者のトップ集団には、100歳にしてなお前進、立ち止まろうとしない元気な年寄りが居る。業界紙に、100歳を超えた聖路加国際病院理事長 日野原さんについて記述があった。「毎日18時間労働だが、毎日快調で、目覚めたときにその日のスケジュールを確認して、前向きな気持ちでスタートすることができる。」と笑顔で語り、更に「次の世代を担う若い人を育てるのが私のミッション」とあった。

さっぽろ雪まつりやライラック祭りを立ち上げ、北海道を観光名所にした“仕掛け人”と評される石林清さん98歳。「忙人は老いず」を信条に今も、社会貢献に尽力されている。酒豪。寸暇を惜しみながら日本酒を楽しまれる。

詩人の柴田トヨさん99歳。処女詩集を出版した。最近、100歳の女性詩人のベストセラーとして、紹介されている。

昭和30年から56年間、書き続けた絵日記が大学ノートに2000冊。これを基に漫画を出版。漫画家デビューした竹浪正造さん93歳。

次世代、次々世代、前期高齢者のまた前の世代はこれら的高齢者に負けないようにやれるだろうか。当分活力ある高齢者の社会は続く。

- 明治、開国の時代に世界の技術に挑んだ若い日本人。身に付けた伝統の技。俺の技が一番、超えるなら超えてみろ。その気概で作成した美術品、工芸品の数々。日本の技が生んだ世界に誇る製品が輸出された。今、世界各国の一流美術館等に多数保存されている。超貴重品で観る事ができない。

世界最多の星数をプラネタリウムで投影する技術を開発した日本の若者。そして、更に極限まで微細(等級)な星を投影するための原版作成に、最近、南米チリの5,000メートルを越す高地で写真撮影に挑んだ。次はヒマラヤだと言っていた。一途な向上心である。明治に伝統の技をもって製作に挑んだ若者に負けてはいない。

経済不況やTPPにゆれる国内だが、日本に必要な活力の素は多数にある。

小麦粉は 豊かな食事の コンダクター

あなたの豊かな食生活のために

週末もパンを囲んで楽しい団欒

さそいあい、いつでも、どこでも、うどん・そば

インスタントラーメン
は世界の食文化

希望の一日はホットケーキから

麺には旬の味、春・夏・秋・冬

家族で楽しい、みんなでおいしい
ピスケット

パスタなら父さんも、私も、僕も三ツ星級

パン粉がきめて、おいしいコロッケ・とんかつ

てんぷら・ギョウザ
ムニエルはわが家の味

現代に生かそう伝統食品 焼きむすび 生むすび

(財)製粉振興会
全国小麦粉実需者団体協議会
製粉協会・(協)全国製粉協議会

製粉振興 11月号 (No.539)

発行／平成23年11月20日

編集発行人／落合通人

発行所／財団法人 製粉振興会

〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町15番6号
製粉会館2階

Tel.(03) 3666-2712(代表)

<http://www.seifun.or.jp>

Fax.(03) 3667-1883

E-mail:seifunshin@mri.biglobe.ne.jp

禁無断転載